ISSN 2186-6937

成安造形大学附属近江学研究所

紀 要

第６号

近江学研究所

JOURNAL OF OMI MULTICULTURAL INSTITUTE OF SEIAN UNIVERSITY OF ART AND DESIGN NO.6

目次

［近江学研究］
「近江の絵馬」現況調査　調査報告 3 …… 3
吉村　俊昭

近江の水をめぐる 4 …… 21
石川　亮

寄人衆の役割に見る五箇祭
～多様なコミュニティが結び、支える祭礼の一事例～ …… 39
加藤　賢治

「大森鉄之助の物語」
滋賀から仏領ニューカレドニア、そしてパリへ……津田　睦美……59

「魚治　鮒寿し」を描く……西久松　吉雄……71

［近江学研究］

「近江の絵馬」現況調査　調査報告 3

吉村　俊昭

［近江学研究］

「近江の絵馬」現況調査　調査報告 3

吉村　俊昭

Name :
YOSHIMURA　Toshiaki

Title :
Status Survey of Omi's Emas: Part Three

Summary :
This survey report is a report on the contents of the survey that could not be presented in Bulletin No. 5 and the contents of a survey of previously unexamined Ema that were added in 2016. Although we originally intended to include the entire area survey within Shiga Prefecture, the investigation has not yet been completed. We plan to summarize all the survey contents in the future, including data not yet reported. As for the report in this bulletin No. 6, we will not compare and discuss the emotionality of the Ema, but will describe the features and subject of each Ema.

一、はじめに

「近江の絵馬」現況調査は予定の三年間に加え、二〇一六年も追加調査を行い四年にわたる調査となった。四年目の調査は、諸般の事情で調査が後回しになっていた社寺を対象にした。三年間で県内全域を網羅し大まかに調査したが、まだ県内すべての絵馬の調査が行えたわけではない。今後、調査の全容をまとめるなかで、社寺の縁起を改めて確認するとともに未調査の絵馬を探し補完したいと考えている。今回は、これまでのように地域性を含めた取りまとめはせずに、調査した社寺ごとの絵馬の特徴や特筆すべき画題・内容を主に取り上げた。

二、調査社寺と絵馬の現状

前回の紀要第5号で調査報告2の掲載に間に合わなかった二カ所の報告と合わせて、追加調査の報告を掲載する。

野洲市三上　御神神社（みかみじんじゃ）二〇一六年三月調査

祭神は鍛冶・農耕の天之御影神。式内社。神社本庁の別表社。三上山を神体山とし、養老二年（七一八年）勅命で社殿造営して遷祀されたと由緒がある。十月に執り行われる国の重要無形民俗文化財に指定されている秋季古例祭「ずいき祭」は広く知られ、文化財も多く、鎌倉時代の国宝本殿（写真1）、国指定重要文化財の拝殿、楼門、若宮社などを有する。神体山の三上山は「近江富士」として有名で、山麓からは日本最大の銅鐸を含む二四個の銅鐸が発見されている。三上山といえば古くから語られている「俵藤太秀郷のムカデ退治」伝説もある。

絵馬は唯一「神猿図」が残されていて銅鐸博物館（野洲市歴史民俗博物館、野洲市辻町）に受託収蔵されている。今回、この「神猿図」を野洲市教育委員会の許可を得て調査した。

●天明五年（一七八五）「神猿図」（写真2・3）縦六七cm、横八四cm。飾り金具のある家型の絵馬で、金箔地に神猿が烏帽子、狩衣を羽織り御幣を持つ姿を描いている。墨書は良く残っていて全文を読み通すことができる。

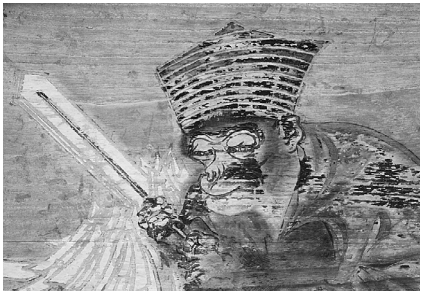
墨書「天明五乙巳年九月」「江戸四谷内藤宿六軒町　奉納願主　山田久兵衛　今堀甚八」「東都麹坊住　花信齋三輪掌珠藤原在栄圖」

天明五年九月に江戸在住の二人の願主により奉納されたことがわかる。絵師藤原在栄については不明である。

御神神社の神猿は、神使いの猿と伝えられる。山王信仰の神

1．御神神社国宝本殿

2．御神神社神猿図



3．神猿図顔部分

猿で有名な大津市坂本日吉大社には長澤芦雪筆「猿図」絵馬があり、自然な姿でくつろぐ母子の猿が描かれている（成安造形大学が二〇一五年度に復元模写を行った）[註1]。また、絵馬ではないが「日吉山王垂迹神曼荼羅」に神猿が衣冠束帯の神として威厳のあるたたずまいで描かれ、御神神社絵馬「神猿図」とは趣がまるで違う。「神猿図」とよく似た御幣を持つ猿図が、日野町村井馬見岡綿向神社の馬舎に懸けられている。綿向神社の猿図は、明らかに馬の守護である「厩猿（うまやざる）」の絵馬である。状態は悪く絵の出来いかんについては判断しにくいが、飾り金具のついた額装がされ装束はつけず御幣を肩に担いでいる。御神神社の猿は様々な祭礼で神使いとして関わっていることから、絵馬「神猿図」が表現の類似性から「厩猿」とするのは無理があるといえるが、御幣を持つ猿を描いた「神猿図」は厩猿を除いて他に類を見ない表現である。「日本霊異記下巻第二十四修行の人を妨ぐるに依りて、猴の身を得る縁」に御神神社の「社神として白猴」についての記述があると行俊勉氏（野洲市歴史民俗博物館学芸員）にご教示いただいた。ただ、白猴は猴となった罪報を語り自らの供養を願うという内容であり、「神猿図」の猿は神そのものを描いているものではなく、また白猿でもないのでこの説話との関係は見つけられない。

近江八幡市長命寺町　姨綺耶山長命寺（いきやさん　ちょうめいじ）二〇一六年三月調査

西国第三十一番札所。武内宿禰長寿霊験の因縁と聖徳太子により開基と伝わる（写真4）。長命寺の寺宝調査は昭和五三年、近江八幡市教育委員会により調査が行われており、本調査はその報告書を参照している。重要文化財の本堂には桃山時代初期の「長命寺参詣曼荼羅」と、絵馬「近江八景図」、絵馬「長命寺境内図」の二点がある。近江八景図絵馬は各地に存在するが、県内では数少ない八景図である。

●元禄六年（一六九三）「近江八景図」（写真5・6）縦一四六cm、横一七七cm。背面に釣り金具があり懸額の絵馬であることが確認できるが、現在は衝立に仕立てられている。板横三枚繋ぎ。武内住職によれば寺内に二三房あり、房の途絶えた時に寺宝などが長命寺に集められたということから、そのうちの一坊に掛けられていたものであるかもしれない。

墨書「奉掛御宝前」「元禄六歳酉正月吉日」「江戸中橋近江屋観音講中　敬白」「長浜呉服町　多賀　佐々木氏　川辺領新川　下新井　源之丞　和吉　藤七　藤兵衛　経之助　忠次」

画面上から山沿いに「比良暮雪」「堅田落雁」「唐崎夜雨」「三井晩鐘」「粟津晴嵐」「石山秋月」「瀬田夕照」、画面下方左から右へ瀬田の唐橋を超えて守山側に「矢橋帰帆」が描かれ、山々や金箔雲の表現などに元禄期の特徴がよく出ている。また八景だけでなく人々の往来や舟、民家、商家が描かれ風俗画としての価値もあるといえる。唐崎神社後方には日吉大社、比叡山が描かれているが山中及び左端上方の神社については不明である。

右下の「長浜呉服町」以下の文字は金箔雲の上に書かれているが、上からさらに緑色の雲（真鍮泥の変色か）で塗りつぶされている。文字の粗さや願主とは関わりないことから、江戸時代の絵馬拝見の落書きであろうか。

●万延元年（一八六〇）「長命寺境内図」（写真7）は本堂内陣奥にあり衝立仕立てになっている。絵馬の全体撮影と採寸はできていない。贅を尽くした非常に大きな絵馬で保存状態も良い。南画の流れの力量のある絵であるが絵師の松石貞は確認できない。

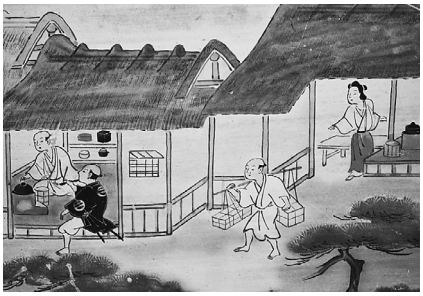
　墨書「奉献」「萬延紀元歳在庚申秋八月」「宿坊實光院」「願主　村井多士衛門　上田長兵衛村井多平　堀七左衛門　神山久兵衛」「平安　松石貞写」

本堂下の庫裡には三点の絵馬が存在する。

●慶応元年（一八六五）「黒馬図」（写真8）縦八二cm、横一一二cm。金箔地に黒馬を描く。黒の額装。江戸末期から明治にかけて活躍した四条派の画家「塩川文麟」の絵馬である。杉板材の油分で変色が見られるが概ね状態は良い。さほど大きくない絵馬であるが静かに立つ黒馬は威厳を感じる。復月は十一月の別名。

　墨書「奉献為祖先冥福」「慶應新元歳治乙丑復月」「平安　塩文麟　印」

●寛政四年（一七九二）「武内宿禰図」（写真9）採寸せず。神功皇后とともに描かれることが多いのだが寺の霊験伝承からか



6．瀬田の唐橋守山側に描かれた茶店

4．長命寺山門から本堂を望む

7．長命寺境内図部分

5．長命寺近江八景図

武内宿禰のみ描かれている。晩夏は六月の別名。

墨書「奉納　寛政四壬子晩夏」「東直時再拝」

●天保九年（一八三八）「宝船」（写真10）採寸せず。恵比須、大黒天を描く。

墨書「奉納」「天保九戊四月八日」剥落がひどく教育委員会報告書に倣う。

近江八幡市多賀町　円満寺（えんまんじ）

八幡山日牟礼八幡宮の東、臨済宗永源寺派の寺院。南北朝時代に永源寺の開祖寂室元光が開基したと伝わる。本堂・庫裏・金毘羅堂・観音堂が立つ。金比羅堂、観音堂に縁のある多くの小絵馬が存在するが、現在は栗東歴史民俗博物館（栗東市小野）に受託収蔵されている。画題は博物館の名称を使用した。

●安政三年（一八五六）「烏天狗図」（写真11）縦七三cm、横九一cm。通常向い天狗として二面描く烏天狗面だが一面を描く。金毘羅堂が境内にあり、金毘羅の使いの烏天狗であろう。

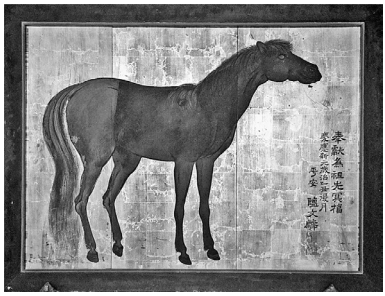
墨書「奉納」「大橋氏」「安政三丙辰九月吉日」

●元治元年（一八六四）「白馬図」（写真12）縦四五cm、横六四cm。甲賀市水口町結城観音堂に表現の似た小絵馬がある。同じ絵馬師か絵馬師集団によるものかもしれない。

墨書「奉納」「寅年女」　裏「元治元年甲子四月吉日」「福濡屋米吉」

●「黒馬図」（写真13）縦四八cm、横六六cm。白馬図に同じ。

10．宝船恵比寿大黒天図



８．塩川文麟筆馬図

11．烏天狗図

９．武内宿禰図

状態は絵の具の浮きが多く、はなはだ悪い。

墨書「奉納」「大橋氏」

●慶應二年（一八六六）「橋弁慶牛若丸図」（写真14）縦五三cm、横九六cm。

墨書「奉納」「京都仙台屋鋪　施主大川仙太郎」「慶應二年寅九月吉日　新調」額部分

「春山　印」画中の絵師名

●安政四年（一八五七）「合戦図」（写真15）縦四五cm、横九一cm。右馬上の武士が金砕棒を持つことから、三好三人衆のうち岩成友通が思い浮かぶ。

墨書「奉納」「安政四丁巳夏」「藤原氏　戌歳男」

●「男拝み図」（写真16）縦三四cm、横四六cm。拝み絵馬は祈願内容を書かないのが普通なので内容は不明だが、画中、提灯の社紋が法輪紋となっているので、太郎坊阿賀神社（東近江市小脇町）との関係がうかがわれる。

墨書「奉納」「三ヵ年間」「志し年男」額部分

●文久三年（一八六三）「女拝み図」（写真17）縦二二cm、横三一cm。

墨書「奉納」「巳年女」「文久三歳極月十一日」　極月は十二月の別名。

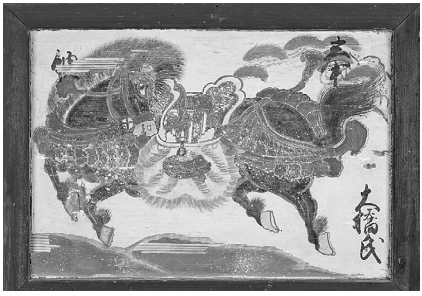
●「神影向図」（写真18）縦三九cm、横五三cm。ご神影は分からないがおそらく垂迹神であろう。

墨書「奉納」

14. 橋弁慶牛若丸図

12. 白馬図

15. 合戦図



13. 黒馬図

●「梵天来迎図」（写真19）縦四〇cm、横五九cm。梵天（御幣）が金属製で五色の雲と人物が木製のレリーフになっている。金毘羅信仰では金幣が象徴として描かれ御幣来迎が各地に見られる。この絵馬も金毘羅堂に関わったものと考えられる。

墨書「奉納」「浅井村　深尾氏」額部分

●明治二年（一八六九）「賽子断ち図」（写真20）縦三〇cm、横三七cm。サイコロを斧で割る図柄。断ち事絵馬。

墨書「奉納」「明治二巳年三月吉日」「二六歳男」

●天保九年（一八三八）「酒断ち図」（写真21）縦三一cm、横四三cm。年数が書かれていることから断ち事絵馬であろう。伊勢えびが酒を飲んでいるようにも見えるが、伊勢えびが何を意味するか不明。

墨書「奉納」「天保九年戊戌五月吉日」「奥野氏　拾ヶ年間二一歳男　五ヶ年間二二歳女」

●嘉永七年（一八五四）「常盤御前図」（写真22）縦九二cm、横五一cm。断ち事錠もの絵馬。額縁の各辺に錠前をかたどった銅版が打ち付けられ禁酒三年の文字が朱書きされている。常盤御前と酒は関係がない。

墨書画中「奉納」「願主　清一郎　□□　伊三郎」額「嘉永七年」「寅之文月日」「三年禁酒」　絵師名が書かれているが判読できない。文月は七月の別名。

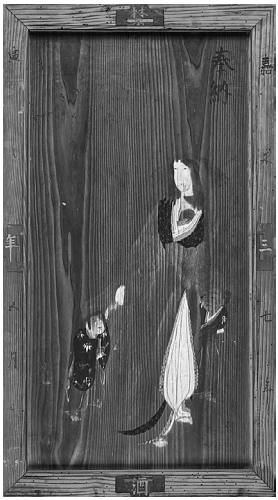
●安政七年（一八六〇）「琴平神社社頭図」（写真23）縦五三cm、横六三cm。

18. 神影向図

16. 男拝み図

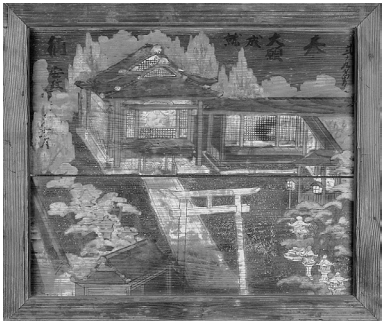
19. 梵天来迎図

17. 女拝み図


22. 常盤御前図と酒断ち祈願

20. 賽子断ち図

21. 酒断ち図


23. 琴平神社社頭図

墨書「大願成就」「二十九才男」「安政七年□三月」

●「山姥・金太郎図」（写真24）縦七六cm、横六一cm。子供の成長の祈願絵馬。

墨書「奉納」「願主　朝田氏」額部分「有楽　印」画中

●「白馬図」（写真25）縦二八cm、横四〇cm。子供の成長の祈願絵馬。腹掛けに琴平神社の寺紋がある。

墨書表「奉献」「五歳男子」裏「明治一九年戌六月　為心町高山話助　長男平次郎」

大津市石山寺　石山寺（いしやまでら）

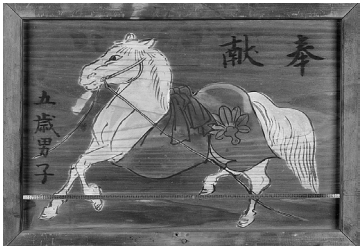
西国三十三所観音霊場第十三番札所。奈良時代後期、聖武天皇の発願、良弁により開基。寺名由来の硅灰石がそびえ、国宝の本堂・多宝塔をはじめ、経典・聖教類、仏像、絵巻など多くの国宝、重要文化財がある。近江八景のうち石山秋月の場所。

絵馬は本堂に二点、宝蔵に十数点ある。石山寺には調査趣旨をご理解いただき、

27. 田村麿退治夷賊之図

24. 山姥・金太郎図

28. 田村麿退治夷賊之図部分の地蔵菩薩



25. 白馬図

二期に分けて収蔵場所から移動させての調査が可能な絵馬のみ調査した。本堂の絵馬以外は、収蔵されたままで公開されていない。絵馬の画題はついていないが参考にした「扁額規範」等の画題や、よく使用される画題を当てはめた。（写真26）

●元文四年（一七三九）「田村麿退治夷賊之図」（写真27・28）縦一一九cm、横一四六cm。構図は清水寺（京都市東山区清水）の海北友雪画の田村麿退治夷賊之図（横六間、縦二間とある）の写しである。海北友雪の絵馬に比べかなり小さめであるため、元々の絵の中央部陸上の混乱する夷賊を省き、田村麿と海上の夷賊だけを描いている。双方の軍勢は小ぶりで大いくさの感はない。右岩上に、敵の矢を防ぐ地蔵菩薩と敵に矢を射る毘沙門天等、右中央に軍配を打ち振る田村麿が描かれている。田村麿が信心していた観世音は海北友雪の絵馬には登場しないが、ここでは田村麿の頭上に描かれている。夷賊は鬼の姿に変えて描かれ、彼らが乗ってきた船も得体の知れない乗り物に変わっている。田村麿の夷賊退治説話をより分かりやすく解釈し誇張もいれたためであろう。絵師吉川伯定は確認できない。

墨書「奉懸　御寶前」「元文四歳未九月吉日」「吉川伯定　印」「願主　梅鉢屋重兵衛　梅鉢屋庄兵衛　同熊之助　絵馬屋嘉兵衛」

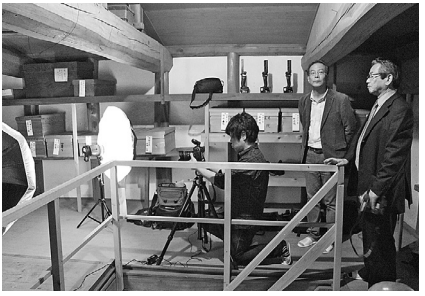
●寛保三年（一七四三）「巴御前図」（写真29・30）縦八四㎝、横一〇四㎝。典型的な巴御前の図柄で木曽義仲に従軍し、関寺の合戦で内田三郎家義の首をかく場面である。木曽義仲の妾で平家物語や源平盛衰記などにその詳細が記され、様々な説話が残る巴御前は女武者として特に人気があった。福岡県新宮町磯崎神社に享保二年（一七一七）奉納のほぼ同形同図同寸大の巴御前図がある。山形県寒河江市寒河江八幡宮にも享保三年（一七一八）奉納の同図のものがある。「厳島絵馬鑑」には日州（宮崎県）飫肥領崎多右衛門が寛延四年（一七五一）に奉納した御前図絵馬があったことが記されていて、これも同図である。巴御前図は粉本が流布していたのであろう。厳島神社の巴御前図は石山寺の巴御前図と同じ日州飫肥からの奉納であり、わずか八年しか奉納時期が異ならないことからなにかしら関連があると思える。石山寺巴御前図絵馬は金箔地に大きく両騎馬武者が描かれ躍動感があり武者、馬、甲冑にわたり力強い詳細な表現である。巴御前の顔部分が剥落して下絵の線しか見えないのは残念である。

墨書「奉掛御寶前」「寛保三癸亥年五月吉日」「日州飫肥之住　山田武昭女」

●宝暦十年（一七六〇）「宇治川の先陣争い」（写真31・32）「佐々木四郎高綱（左）」と「梶原源太景季（右）」の対。縦八五㎝、横一〇九㎝。両絵馬は同寸。この画題も「平家物語」「源平盛衰記」に記され有名なテーマであり、武者絵馬の画

33. 曳馬図

29. 巴御前図


26. 石山寺宝蔵にて調査撮影風景

30. 巴御前図部分

題として多く用いられているものである。木曽義仲軍と源義経が宇治川を挟んで争い、義経軍の先陣争いをした二人の武者が佐々木高綱と梶原景季である。絵馬は互いに策をめぐらせ、まさに先陣を競おうとしている様子を二枚に描き分けている。左側の絵馬佐々木高綱は振り返り梶原景季に向かって「腹帯のゆるみがある」と伝えている。馬は白馬の「いけずき」。鎧には四つ目結の家紋が描かれていることで佐々木高綱に間違いはないであろう。右側の絵馬梶原景季は弓の弦を口にくわえて腹帯を締めようとしている。鎧の家紋が並び矢で馬は黒馬「するすみ」である。「源平盛衰記」の話を忠実に表し、非常に丁寧で臨場感のある絵になっている。絵師「藤原守業」は「作之鞍鎧目利伝書」の著者として名が挙がるが詳細は不明。奉納者の「三井高弥（みついたかひさ）」は三井新町家第三代目当主であることが判明したが詳細は未調査である。絵馬の板、額ともに非常に丁寧なつくりで傷みはほとんどない。絵の保存状態も非常に良い。「平家物語」の先陣争いについては紀要第5号解説の項でも紹介している。

墨書「取次　松中坊」「法橋採川藤原守業画　印」「宝暦十庚辰歳三月吉日」「三井高弥」

両絵馬とも右左の書き順が違うが同じ内容の墨書である。

●元禄十年（一六九七）「曳馬図（元禄）」（写真33）縦一二一cm、横一八一cm。非常に状態が悪く、全体に絵の具

31. 宇治川の先陣争い・佐々木四郎高綱

32. 宇治川の先陣争い・梶原源太景季

35. 曳馬図唐鞍部分

34. 曳馬図（本堂の衝立）

の浮きが見られる。大きな絵馬であることから、収蔵場所から動かすだけで一挙に剥落が進むような状態である。金箔地に太めの力のある墨線で馬と舎人を描いている。馬の表現は躍動感にあふれ、舎人の表現も良い。

墨書「奉掛御寶前」「元禄十丁丑年七月吉日」「願主敬白」

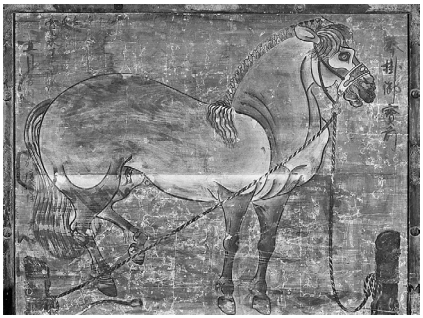
●「曳馬図」（写真34・35）縦中央一二九cm、横一五九cm。家型絵馬。現在は本堂内の衝立に仕立てられている。曳馬を後方から描く珍しい構図である。馬の頭部など剥落がひどく細部は明らかでないが、流れるような墨線が見て取れる。馬の躍動感や馬を押さえようとする舎人の力の入った動きを良く表現している。左の舎人は顔部分が良く残っている。絵のなかで比較的状態の良い唐鞍は、金泥の盛り上げ文様や緑青地に描かれた文様は精緻で美しい。桐板を八枚合わせているが、継ぎ目が分からないほど丁寧なつくりである。奉納年は不明だが江戸前期まで遡るのではないだろうか。

墨書「石場政隠筆　印」

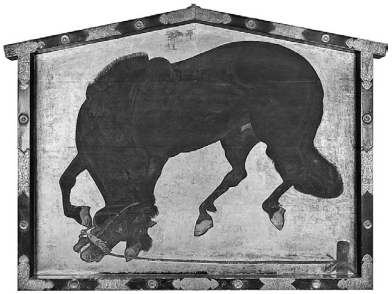
●寛永十二年（一六三五）「繋馬図」（写真36）縦一〇〇cm、横一三二cm。額下部は損失。大津市指定文化財。いささか足先の描き方に不安定さがある。馬の動きが少ないものの堂々とした白馬である。高月観音堂に寛永十七年奉納の繋馬も静かな表現で頭の向きが違うがよく似ている。頭部やたてがみの表現に江戸初期の繋馬図の特徴が表れている。左半分に落書きのような墨線が残る。裏面に万治二年（一六五九）上総からの西国巡礼参詣者の走り書きがある。「この絵を見た」と書き記しているので、万治頃には寺内の手の届くところに掛けられていたのであろう。

墨書「奉掛御寶前」「寛永十二乙亥捻」「五月吉日」「勢州度会住　□□」裏「万治二年亥ノ七月十二日」「上総国折戸村鈴木長八郎　同木戸村六人　同道十人　西國一見之時分書をき申し候」

●寛永十八年（一六四一）「繋馬図」（写真37・38）縦中央一四一cm、横一七六cm。家型絵馬。現在は本堂内に衝立に仕立てられている。繋馬の多くは繋がれることを嫌うような、躍動的な表現が多いのだが、その中でも足を跳ね上げ綱を引きちぎ



36. 繋馬図



37. 繋馬図（本堂の衝立）

ろうと大きく首をひねり地に頭を擦りつけるような構図は珍しい。金箔地に描かれているが、金箔部分は漆の下地で珍しい。額縁との境目の漆の様子から画面と額縁を合わせて作成されたと考えられる。馬の毛並みには墨線に金泥で細線が書き加えられ、仏画あるいは仏像を連想させ、工芸的な一面が見受けられる。絵師立齋は不明。

墨書「奉□」「寄進」「寛永十八歳　月吉日」「立齋」

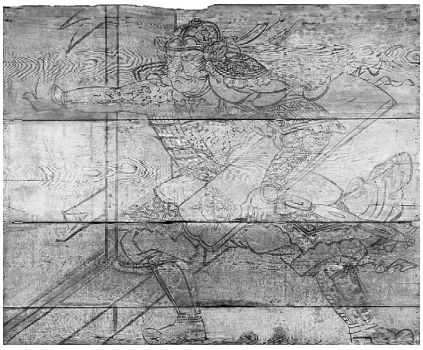
●享保五年（一七二〇）「群馬図」（写真39）縦一〇一cm、横一九〇cm。様々な毛色の馬が十二頭、牧で群れる様子が描かれている。白く残る部分は金箔が貼られていた痕跡がある。馬の表現はバランスが悪く上手いとは言えない。画面構成も不思議な表現となっている。

墨書「奉掛御寶前」「享保五庚子歳□月吉日」

●「朝比奈門破り図」（写真40）縦一四五cm、横一七八cm。額なし。ほとんどの絵の具が剥落して下地の墨線だけが残る。画面からはみ出るほど大胆に描かれ、表情も豊かである。江戸前期鳥居派の浮世絵を連想させる。朝比奈三郎義秀は、和田義盛の三男で強者として数々の伝説があり、歌舞伎の演目や浮世絵に描かれ庶民に人気の武将であった。中でも鎌倉御所の総門を押し開けた朝比奈門破りの話は多くの絵に表された。門破りについては紀要第5号で詳細に解説している［註2］。

●天保十二年（一八四一）「弁慶・牛若丸図」（写真41）縦一二四cm、横一九〇cm。弁慶の七つ道具をしっかり描くため

38.　繋馬図尻尾部分金泥線描き



40.　朝比奈門破り図

39.　群馬図

41.　弁慶・牛若丸図

弁慶は背中を向けている。そのためか薙刀の持ち手が変わって左利きになっている。義経の衣の紋も源氏の笹竜胆が丁寧に描かれ、草双紙を絵馬にした趣がある。表現はやや拙いが、要所に金箔を用い、明るいベロ藍のような青色や朱を多用して色彩豊かに仕上げている。

墨書「湖東石部驛　内貴竹應画　印」「天保十二年辛丑初夏」願主「植村仁左衛門」以下二三名が書かれている。初夏は四月の別名。

三、おわりに

今回で「近江の絵馬」現況調査報告が最後になるが、調査時期の関係から報告に上がらない絵馬がある。次年度、この調査全体をあらためて「近江の絵馬」としてまとめる予定をしているので、その中で未報告分を掲載するつもりである。また、調査全体で取り扱わなかった社寺および絵馬がある。高島市マキノ町海津天神社の狩野山楽筆「繋馬図」、「三十六歌仙図」や日牟礼八幡宮の菱川孫兵衛筆「安南渡海船額」など文化財であり、あまりにも有名な絵馬である。滋賀県内の絵馬の状況調査を優先し、保存管理、研究が進んでいる絵馬は調査対象に含めなかった。ただそれらの絵馬は絵馬研究には欠かせないものでもあり、まとめのなかで先人の研究成果を紹介したいと考えている。

最後に、今回報告した絵馬に関わって様々な方々のご協力、ご教示をいただいた。銅鐸博物館（野洲市歴史民俗博物館）学芸員行俊勉氏、栗東歴史民俗博物館学芸員中川敦之氏、長命寺住職武内隆韶氏、同寺武内健斗氏、石山寺管理部遠江隆行氏および関係の方々にお礼申し上げる。

物語解説

田村麿退治夷賊之図（たむらまろいぞくたいじのず）扁額規範（へんがくきはん）文中より抜粋

同十四年（延暦）東奥の残賊高麿并に悪路王の二人起て達谷が窟に達篭り、辺境を侵し猛威を震ふこと先賊倍し、大に勢ひを張って既に勢州まで責上るよし、国々よりの奏頻なり。誌書には延暦二十年高麿、悪路王達谷が窟より起り、駿河国清見の関まで責上ると云う。清水寺縁起には延暦十四年蝦夷賊起り勢州まで責上ると記せり。帝都には諸卿ことに驚有て、田村麿を征夷大将軍に任じ、節刀を賜ふて凶徒退治の宣旨あり。田村麿勅を奉り、日頃清水寺の観世音を深く信じたれば、当寺に詣で怨敵悉退散を祈念す。延鎮和尚為に勝軍地蔵菩薩、勝敵毘沙門天の両像を造って征敵勝軍の法を修す。田村麿は官軍を率ひて勢州に発向す。夷賊勇を震ひ官軍を防ぐこと龍の雲中を走り虎の怪風を起こすに似たり。時に陣中より一僧一男現じ僧は敵の矢を防ぎ、男子は寶箭を放ち賜ふ。矢雨の降るが如く。夷賊の勢ひ忽ちに隤て乱れ騒ぐに、また大風起て敵を吹倒し大雷頻に震て賊中に堕落たれば、田村麿孟々男。敵を粉の如く砕きたれば夷賊怪風に船を覆し官軍に追はれ七烈八裁に敗て奥州に引退く。田村麿賊を逐て奥に下り賊主高麿は射斃し悪路王を生捕て誅拭大に凱旋を唱えて帰洛あり。

源平盛衰記　巻第三十五

高綱渡宇治河事（たかつなうじがわをわたすこと）

平等院の小嶋崎より武者二騎蒐出たり。梶原源太と佐々木四郎と也。景季が装束には木蘭地の直垂に黒革威の鎧に三牧甲の緒をしめ、滋藤の弓の中を取り二十四差したる小中黒の矢負、練鍔の太刀佩て、鎌倉殿より給りたる磨墨と云名馬に、黒塗の鞍置て騎たり。高綱は褐衣の直垂に小桜を黄に返たる鎧に、鍬形打たる甲に笛籐弓の真中取。二十四差たる石打の征矢頭高に負、嘯物造の太刀帯て、是も鎌倉殿より給たる生唼（いけずき）に、黄覆輪の鞍置てぞ騎たりける。誰か先陣と見処に、源太颯と打入て遥に先立けり。高綱云けるは、如何に源太殿、御辺と高綱と外人になければ角申。殿の馬の腹帯は以外に窕て見物。此川は大事の渡也。河中にて鞍踏返して敵に笑はれ給なと云ければ、左も有らんと思て馬を留、鐙踏張立挙、弓の弦を口に噛、腹帯を解て引詰々々しめける間に、高綱さっと打渡しめ二段計先立たり。源太たばかられけりと不安思て、是も打浸しめ渡しけるが、馬の足綱に懸て思様にも不被渡。高綱は究竟の逸物に乗たれば、宇治河はやしといへ共、淵瀬を不云さゞめかして金に渡し、向の岸近く成て、高綱が馬綱に懸て足をさと歩除ければ、自元期する事なれば、太刀を抜、大綱小綱三筋さと切流し、向の岸へ打上り、鐙踏張弓杖突て、佐々木四郎高綱、宇治河の先陣渡たりやと名乗も果ぬに、梶原源太も流渡に上りにけり。

巴関東下向事（ともえかんとうにげこうのこと）

角問は木曾殿の乳母子に、中三権頭兼遠が娘に巴と云女也。主の遺の惜ければ、向後を見んとて御伴に侍ると云。鎌倉殿の仰を蒙、勢多手の先陣に進るは、遠江国住人内田三郎家吉と名乗進けり。巴は、一陣に進むは剛者、大将軍に非ずとも、物具毛の面白きに、押並て組しや首ねち切て軍神に祭らんと思けるこそ遅かりけれ。手綱かいくり歩せ出す。去共内田が弓を引ざれば、女も矢をば不射けり。互に情を立たれば、内田太刀を抜。されば女も太刀に手を懸ず。主は急たり馬は早りたり。巴、内田、馬の頭を押並、鐙と鎧蹴合するかとする程に、寄合互に音を揚、鎧の袖を引違たり。やをうとぞ組たりける。聞る沛艾の名馬なれ共、大力が組合たれば、二匹の馬は中に留て働かず。内田勝負を人に見せんと思けるにや、弓矢を後へ指廻し、女が黒髪三匝にからまへて、腰刀を抜出し、中にて首をかゝんとす。女是を見て、汝は内田三郎左衛門とこそ名乗つれ、正なき今の振舞哉内田にはあらず。其手の郎等かと問ければ、内田我身こそ大将よ、郎等には非ず、行跡何にと申せば、女答て云。女に組程の男が、中にて刀を抜、目に見する様やは有べき。軍は敵に依て振舞べし。故実も知ぬ内田哉とて、拳を握り、刀を持たる臂のかゝりをしたたかに打。余に強く被打て把る刀を被打落、やをれ家吉よ、日本一と聞たる木曾の山里に住たる者也。我を軍の師と憑めとて、弓手の肘を指出し、甲の真顔取詰て、鞍の前輪に攻付つゝ、内甲に手を入て、七寸五分の腰刀を抜出し、引あふのけて首を掻。刀も究竟の刀也。水を掻よりも尚安し。馬に乗直り、一障泥あふりたれば、身質は下へ落にける。

註

1. 成安造形大学附属近江学研究所紀要第4号50頁
   成安造形大学附属近江学研究所文化誌「近江学」第8号85頁86頁87頁
2. 成安造形大学附属近江学研究所紀要第5号73頁

参考文献

・合田珉和・北川春成縮図「扁額軌範」全五巻　吉野屋大谷仁兵衛　文政二年
・渡辺黄鵠著・渡辺対岳縮図「厳島絵馬鑑」全五巻　天保三年刊　嘉永元年後印
・「近江八景之図」　江州志賀郡瀬田橋西　田中屋惣七板　江戸時代
・臨川書店「新修京都叢書」第八巻　扁額軌範・花洛絵馬評判　一九九四年第二刷
・木村至宏「図説近江古寺紀行」河出出版社　一九九五年
・司馬遼太郎・白洲正子・水上勉「近江路散歩」新潮社　一九八八年
・信多純一「祈りの文化―大津絵模様・絵馬模様―」思文閣出版　二〇〇九年
・須藤功「大絵馬ものがたり5　昔話と伝説の人びと」農山漁村文化協会　二〇一〇年
・岩井宏實「絵馬に願いを」二玄社　二〇〇七年
・大津市歴史博物館「庶民の祈り―近江の絵馬」一九九一年
・茨木県立歴史館「祈りの歴史と民俗　絵馬」一九九八年
・福岡県立美術館「神にささげた祈りの美　絵馬」一九九九年
・佐藤健一郎・田村善次郎「祈りの民俗誌」八坂書房　二〇一三年
・瀬川欣一「近江の昔ものがたり」サンライズ出版　二〇一〇年
・歴史魂編集部「月岡芳年の武者絵　大日本名将鑑」アスキー・メディアワークス　二〇一二年
・石川透・星瑞穂「源平盛衰記絵本を読む　源氏と平家合戦の物語」三弥井書店　二〇一三年
・松葉涼子　立命館文学第六三〇号　論文「近世期の画像資料に見る門破り図像の受容と展開」二〇一三年
・梶原正昭　校注「平家物語」おうふう（桜楓社）一九八四年
・遠藤嘉基本・春日一夫　校注「日本霊異記」岩波書店　一九七一年
・藤本久兵衛「源平盛衰記　巻三五～三六」国立国会図書館デジタルコレクション　寛永年間　Info:ndljp/pid/2544861　二〇一六．十二．六閲覧
・岡登貞治「日本の文様図鑑」東京道出版　一九六九年
・岡登貞治「文様の辞典」東京道出版　一九六八年
・徳島県立近代美術館作家詳細情報　www.art.tokushima-ec.ed.jp/srch/塩川文麟二〇一六．十．二六閲覧
・国立国会図書館サーチ　iss.ndl.go.jp/books/　藤原守業二〇一六．十二．二〇検索
・三井家編纂室編「稿本三井家資料」一橋大学附属図書館　CiNii　ci.nii.ac.jp/ncid/　三井高彌二〇一六．十二．二〇検索

近江の水をめぐる 4

石川 亮

近江の水をめぐる４

石川　亮

Name :
ISHIKAWA　Ryo

Title :
The Water of Omi：Part Four

Summary :
I began making artworks using water I collected from springs throughout Shiga Prefecture in 2010. This marked the start of what has become my ongoing investigation of the background and roots of the various springs of Shiga Prefecture, most of which have names that can be traced back to traditional stories, area names, and the like. The focus of my current research is on the life that sprang up around water sources and the cultures to which the water gave rise.

近江（滋賀県）の地の水探求は自己の造形表現から始まった。二〇一七年の現在も様々なテーマでフィールドワークを行う際、必ず湧水の発見はあると言って良いだろう。探究を始めた当初は事前に書籍やガイドブックなどで調べることやインターネットで紹介される情報を元に湧水ポイントを目指して探し出すことが主であった。現地へ訪れると地域の方々との出会いがあり、急遽聞取り調査からの新たな湧水発見に至ることもしばしばあった。昨今は他の目的で調査やフィールドワークをしていると、何となく湧水（水源）と巡り合えそうな空気を掴むことができるようになってきている。人々の暮らしや営みが活気づく場所には必ず綺麗で豊富な水を蓄える場がある。つまりそれは逆で水が豊富であるから人々が集い、営みが始まりやがて文化をつくり出していくのだと漸く気付いた。現在、私が把握している湧水ポイントは一二〇ヵ所をすでに超えており更に増え続け留まるとは到底思えない。琵琶湖を基点に淀川水系の最上流先端部である近江の水源は分水嶺から直接的に恵を受けていることから今後も無数に現れることは間違いない。次回の全体水（近江の水源）作品発表がいつになるかは未定だがその時に改めて整理されることと予想している。

一、面白い水、難しい水（おもしろいみず、むずかしいみず）－

面白い水、難しい水というタイトルをつけてしまった。これまで思いのままに、共通するテーマを見つけ出し、三、四カ所の水場を紹介してきた。思い起こせば美術家である私が初めて自分に近いエリアの考え方でタイトルを決めたのではないかと考える。さて、何が面白いのか、難しいのか、現代美術作品を目前にした時に、一番最初に作品がどうなのかを判断する分かれ道と言って良いだろう。その後の評論や感想は論者のこれまでの知識や経験等から、或は技術力の評価やその作品の強度をサポートしていくようなことであろう。些か乱暴な冒頭文であるが、これまで私が出会った中で印象に残っている面白い、難しいを湧水の現場に当てはめてみていきたい。

小碓の泉（おうすのいずみ）米原市間田（はざまだ）

国道３６５号を南東方向へ姉川を左手に見ながら少し進むと野一色東という交差点がある。県道19号が東西に40号が南北に交わっており、この辺における私の水汲み研究の基点になっている。小田（やないだ）、間田（はざまだ）、春照（すいじょう／古くは水上）という地名が連なっており、伊吹山麓であることから湧水の宝庫といって過言ではない。北国脇往還の宿駅のあったところである。その交差点を真東に19号線を少し進むと左手に小さな看板を見付けた。側溝を跨ぐように観光ガイドを

伊吹山麓の稜線が見える。小碓の泉

湧水口から水を汲む筆者。小碓の泉

道端の表札。小碓の泉

湧水口へ向かう途中の綺麗な水草。小碓の泉

唐突に知らせる看板がある。手描きで地元の人が描いたかのような案内をよむと、「小碓の泉は日本武尊にゆかりのある居醒の水の一つで七つの丘に囲まれた間田は古代から式内岡神社、日御子古墳、番匠岡古墳等がありこの低地の東方（約四百米）に清水の湧き出るところが古代遺跡の小碓の泉です。」と記されていた。住宅がちょうど途切れた場所で林に導くような景色であることから入口だとわかった。案内にあったように東へ、勢いよく流れる小川に沿って上流を目指し歩くと段々足元が悪くなってくる。少し不安になりながらも辺りを見渡すと緑に覆われながらも空が見え、とても清々しい。通常なら案内に従って少し歩くと水源が見つかるのだが小川はまだまだ続く。私が訪れた季節は冬の終わり雪解けの頃であったか、小川の水とそこに浮かぶ水草がとても美しかったと記憶している。気付くと農地に迷い込んだような感じである。恐る恐る進むと丘陵地との境目に行き着いた。丘の上を見上げると伊吹山の稜線がくっきり見える。境目を目指してできるだけ近づいた。既にトレッキングシューズには水がかなり染込んでいる。ようやく地表の裂け目を見付け水面がもやもやしているのを確認する事ができた。水面を下流の方へと見渡していくと高さが変わるところで溢れんばかりの水がジャバジャバ音を立てていることから相当の水が湧き出ていることがわかった。辺りに湧水を示す案内はなく半信半疑だ。しばらくその場に立ちすくんでいると入口の案内表示のことを思い出した。「下界との境界はあそこだったのだ」と…。湧水を探し出す仕事をはじめて間もない頃だったので、今でも深く印象に残っている。命の水を見つけ出すのに言語は必要ないのだと、観光案内から導かれて野生の世界へ入り込み、動物が水にありつくかのごとく、原始脳に直接ひびいてくる感覚はこのことであろうかと、感動というものとも違う何か不可思議な記憶である。二度目に訪れたときは梅雨明けの頃で野草が背丈程まで生い茂り水源に到達することができなかった。

広野の涌水（ひろののゆうすい）高島市地小原～雲洞谷辺

再び辿り着く自信の無い場所である。二〇一二年六月、高島市朽木周辺の国道と県道沿いの湧水を求めて野放図に車を走らせていた時に出会った水場だ。国道３６７号線を北上して山神橋に差し掛かったところに三叉路が現れる。橋を渡らず安曇川の支流の方へ進むと再び三叉路が現れる。次も同じく支流の方へ県道23号をしばらく進むと三たび三叉路にでる。くつきの森の看板を横目に朽木能家方向を直進すると県道７８３号になる。何回か蛇行を繰り返しながら少しずつ登り坂を上がると、地小原の集落を過ぎたところで対向二車線の道が狭まり一車線になる。不安も期待も増し、谷沿い左右に川を眺めながら車を進めると山の斜面側に小さな木製の表札が現れる。側道の山側に車を寄せて、表札に近づくと崖からパイプが突き出ており、そこから勢いよく水が出ている。初夏の暑い日だったので一先ず顔

道端にある広野の涌水

広野の涌水で水を汲む筆者

広野の涌水

を洗ったのを記憶している。パイプの周りは苔むしており、周囲はシダ植物等が生えている。普通は鬱蒼としそうな感じだが、こまめに誰かが草抜きをされているのであろう。パイプの上には広野の涌水と書かれていた。ここの「湧水」は「涌水」である。少し左に目を向けるとホタルの生息地と書かれホタルのイラストが描かれた黄色い八角形の看板が目に入った。道路標識でいう黄と黒の危険を表すタイプだ。実はこっちの標識が先に目に入って次に木製の表札と水場に気付くのである。道沿いに突如として現れるホタルの生息地ならぬ水場である。

（もしかすると、もうちょっと行ったところ、雲洞谷地区、洞照寺を越えた辺りの南東方向の斜面だったかもしれない。その先にとても不思議な雰囲気の山神神社があるがそこまで間にある事は確かなのだが、んー難しい。）

久太郎山の湧き水（くたろうやまのわきみず？）
七右栄門田の名水（しちえもんたのめいすい？）高島市今津町椋川

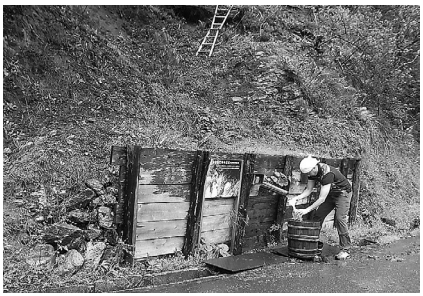
二つの名称を持つ水である。久太郎山の湧水と七右栄門田の名水と案内板に記載されている。正直言って正しい読み方がわからないのである。そして何故二つの人名を冠したのであろうか、おそらく久太郎さんの山、或いは七右栄門さんの田に関係する湧水なのであろう。二〇一〇年の二月と二〇一二年の六月の二回現地を訪れたのだが、どちらも現地の人と会うことがで

きず、所以を尋ねることができなかった。その場所は高島市朽木から国道367号線を北上、檜峠を越えて今津町へ、途中谷へ下りる手前に西方向へ曲がる道がある。道路表示に従い椋川方面へ、しばらく走り左側へ大きくカーブをきりながら安曇川の支流を上流の方へ登っていく。道幅も狭くなり辺りはかなり物寂しくなってきた。少しひらけて何軒かの集落が見えると右側に近江の国を象徴するような渋い雰囲気を醸し出す神社が現れた。椋川の中心地に当たる場所なのだろうか、日当りがよく南側に田畑が広がり道沿いに小川が流れている。鳥居の扁額をみると日吉神社と記されていた。入ると真直ぐに伸びた杉が迎えてくれ奥の山裾に社がある。社の屋根の外側に柱が数本あることから冬期の大雪に耐える仕様になっていることがわかる。神社を出て更に上流へ数メートル歩くと何やら木桶が道に張り出しているのが見えた。近づくと山の斜面に対して板で土留めがなされており太めの竹筒が板から突き出ている。そこからジャバジャバと音を立てて水がその木桶に流れ込んでいた。

棚の箱にはコップが三つ程置いてあり、いつでも誰でも水が汲めるようになっている。古い写真をデジタルプリントしたアルミ製の看板がついていた。読むと「七右栄門田の名水（久太郎山の湧き水）冬は暖かく夏は冷たい 岩の間から出ている湧き水 京都新聞県民版に紹介され多方面から人が訪れる。右下に平成二一年吉日昭和十一年八月三日撮影 作 作者名」と記されていた。その写真は昭和初期と思われる風景に女性が取水口に顔を向け水を飲んでいる。その前でおかっぱ頭の女の子がこちらを向いて笑っており、後方に母親と思われる女性が佇んでいる。これまで様々な表札を見たが現代の技術を用いながらも景観を犯さず、これに勝るしっかり作られた表札を見たことがない。神社と水場が近くにあり、日当りも良いことからこの辺の一等地であることは間違いない。おそらく村の人々が集う場所であったのであろう。誰かに会ってお話を聞いてみたかったが、とうとう会うことはなかった。

「面白い水、難しい水」は全くもって私の主観である。今回紹介した水において何か共通する点を感じ取っていただけたであろうか？

わからないことが多くて考えれば考える程、謎が増えることは何においても面白いし、難しいことである。近江にはまだまだ沢山このような水が存在すると想像する。その理由をじっくりと調査し、ゆっくり紐解いていくと暮らしや歴史の真実が見えてくるかもしれない。



久太郎山の湧き水を汲む筆者

二、始りの水、元の水(はじまりのみず、もとのみず)―

近江の湧き水を汲むそもそものきっかけとなった水を紹介したい。以前にも書いたが美術家である自身の作品、「全体―水(近江の水源)」構想を始める前に近江において様々な水を集めるにあたってどのようなロジックで採取するのが良いのか考えていた。川の源流をたどり汲水する。或いは琵琶湖の水(全体の水)になる寸前の河口付近の水(〇〇川の水)を汲む。この他、地図状における経線緯線で囲まれたブロック内に存在する水を汲む。など水の集め方について、試行錯誤していた。いつもの様に自宅周辺の大津市仰木の里から仰木へと散歩をしていた時のことである。豊かな棚田の田園風景を見ながら歩いているとそもそもこの田畑を潤している水源は何処なのか気になってきた。地域の神社である小椋神社に辿り着き、調べていると奥宮の存在に気付いた。この奥宮は滝壺神社と呼ばれ名前の通り、水が湧き出し地域の方によって整備された小さな滝から常時水が流れ落ちている。所以は後述するとして、「このような水を調べてみよう!」ということになった。家に戻り、名前の有する水が近江にはいくつあるのか、二〇一〇年の時点で書籍や観光ガイド、ネット情報だけで四〇ヵ所以上あることがわかり、真中に大湖を有することからまだまだあることは想像がついた。さらに近江は京都を上回る社寺仏閣を有する場所である。それだけ信仰が厚く神仏が習合する以前から地域信仰があったことも想像できる。社寺には必ず手水が存在し手を水で清めてから手を合わせ、祈るのである。生命体が生きていくうえで欠かすことのできない水、ここには日本人の自然観や宗教観の元となる感覚があるのではないか。

美術家である私が水を汲むことを表現にしようと考えた始りの水であり、元の水に迫っていきたい。

道に突き出る久太郎山の湧き水

板でしっかり土留めをした水場。久太郎山の湧き水

滝壺神社　祭神闇龗大神（たきつぼじんじゃ　さいじんくらおかみおおかみ）

湖西道路を北上、仰木雄琴の出口を下りて左折、県道３１５号を比叡山方面へ走ると右手に月読の棚田、その向うには琵琶

湖が広がっている。次に郵便局前の交差点を鋭角に左折するとそれが仰木集落の尾根を走るメインストリートになる。辻のバス停付近で少し右に折れると鳥居が見える。そこは里宮である小椋神社へと続く参道になっている。直に左に別れる道へ、上仰木を過ぎ、しばらく登り進むと元三大師道と記された石造道標が目に入る。左はその先、比叡山横川の元三大師堂へ続く道である。今回は右へ行く。この道は仰木峠を越えて京都大原へ続く道である。峠に立つ一本杉を目指し左手に小川を見ながら進むと棚田の風景から森林に変わるところに差し掛かる。そのちょうど境界に位置するのが小椋神社の旧社地、現在は奥宮、滝壺神社である。仰木の方々で整備されたのであろうか「滝壺神社祭神闇龗大神」と記された石標が建ち裏に由緒書がされている。読むと

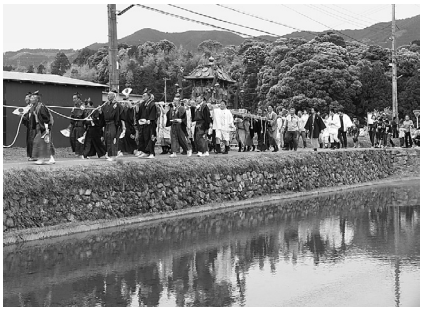
人皇第三十八代天智天皇が奈良から近江大津に御遷都乃砌（さい）山城から仰木峠を越えて近江に御入りになった際御伴をして来た丹生川上神社の宮人加太夫と言ふ人が清らかな水の滝を見て此乃住き地に永住した其乃時川上神社の祭神闇龗大神乃分霊を御祀した乃が柳々小椋神社の始めである後今乃地に移し式内社小椋神社であり今尚仰木乃氏神として永久に尊崇せらる此乃所が仰木発祥乃地である

とある。その横の小さな滝壺へ水が流れ落ちていた。ふと見上げると奥まったところに石の鳥居と祠が見えた。扁額に

元三大師道の道標を右へ

闇龗大神参道の石標

滝壺神社の由緒書


仰木の田圃に水が張られる。（仰木祭）

は「闇龗大神」と記されている。闇（くら）は谷あいの意味。龗（淤加美神）は、古来より雨を司る龍神である。

実は住民が汲みに来る水は更に脇の山道を少し進んだ道沿いにある。斜面に筒が二本程差込んであり、いつも勢い良く水が出ている。京都と近江の往来が古くからある場所で森と里の境界にあり斜面がなだらかになる場所であることから水場の条件を全て満たしているといえる。

毎年五月三日は小椋神社の祭礼、仰木祭の日である。あたりは雨乞いや祭の合図の太鼓が打ち鳴らされる。上仰木の瀧川幸作（たきがわこうさく）さんによると「太鼓の鳴りはリズムではない。あれは雨乞いの祈祷を言葉で表す代わりに音で示している。」と話された。

また、小椋神社の参道沿いに住む伊藤士良（いとうしろう）さんは代々向いに鎮座する山地神社のお世話をされてきた。その間を通る道と小椋神社参道の交差点には「闇龗大神参道」と記された石標が建っている。この道は先述した道に先で合流し奥宮への参道であると伊藤さんは話され、先代の伊藤家が建立されたことも付け加えられた。仰木に住まわれる方々のこの地に対する思いはある種の凄さを感じる。これが土地に対する畏敬の念なのかもしれない。

この祭礼が終わるといよいよ田植えが始まる。田圃に水が染み渡りカエルが鳴き出す風景はこの地が自然と共にくらしてきた豊かさの象徴に他ならない。仰木はこの水ともう一本

住民が汲みにくる湧水（祭神闇龗大神）

水が張られた仰木の棚田

祭神闇龗大神

違う谷筋からの水がくらしを支える水となっているそうだ。

何を隠そうこれが湧水を探究する糸口となった始りの水である。

樹下の水（このもとのみず）日吉大社 樹下宮霊泉

「日吉大社にはもう一つ水が有る。」

東本宮の山手に位置する「亀井霊水」と山裾から流れる「大行事水」は以前とりあげた。もう一つとは東本宮の楼門から見て左手、牛尾山の麓に琵琶湖方向を向いて鎮座する樹下宮（じゅげぐう／このもとのみや）の本殿の床下にある井戸のことである。本殿の裏側に回ると御神体が祀られている下は分厚い格子の扉がありしっかりと錠がされている。近づくと扉の向うは空洞になっており薄暗くて見えにくい。権宮司の井口健（いぐちたけし）氏にお願いして見せていただくことができた。以前から神仏習合の文化にふれるため、学生と比叡山回峰行の道を歩き、牛尾山を下りて一息ついた時に東本宮にて幾度とお話しいただいた。次回は…と。

今回念願が叶い、本殿の中に入る許可をいただいた。いよいよ接近するとなると緊張が高まり、自然と何度も手を合わせた。御神体の直下は中空構造になっており外の光がかすかに入ってくる。土間の中心に直径六〇センチ程度であろうか穴が出現し円形に組まれた石積みが地中へ向って見えた。井口氏はそっと近くに燭台を置き、ろうそくに火を灯してくださった。すると水面が揺れるのを確認することができた。耳を澄ますと微かに湧き出す水の音が聞こえた。美しいと感じた瞬間、即畏れ多い気持ちがせまってきた。何とも言いがたい感覚はこの先忘れることはないであろう。

社務所へ戻る途中、禰宜の須原紀彦（すはらのりひこ）氏に出迎えていただいた。須原氏は日吉大社の歴史や様式など様々な研究をされており、神社のあるべき姿を持続するため自らナタやノコを持ち境内の整備をされている人である。（筆者には少なくともそのように見えている。）

そして今日掴んでいる様々な資料を見せていただきながら樹下宮について色々お聞きすることができた。さて、この霊泉についてであるが正式な名称及び文書に伝わる由緒は現在のところ皆無だそうだ。ただ、これまでの研究においては神奈備山研究の景山春樹氏や元宮司の嵯峨井建氏が提唱する八王子山（牛尾山）の里宮とみて、霊泉が太古の祭祀場であった可能性をあげる考察は非常に興味深い。現在も樹下宮の霊泉、亀井や大行事水が湧出しているあたりの砂利を少し掘ると水が染出してくる。太古も豊かに水を湧出し、この周辺が生命の元であることを想像してしまうのは私だけであろうか。他にも樹下宮の持つ潜在能力は多々ある。樹下宮は神仏習合の時代、十禅師と呼ばれて多くの信仰を集め、本殿背後は禁足地であり玉垣で囲まれていた。十禅師馬場（参道）が東本宮の参道と並行して現存していること、上七社（西本宮、東本宮、宇佐宮、牛尾宮、白山

宮、樹下宮、三宮）の順列の六番目でありながらも山王祭での神輿に鳳輦（ほうれん）が掲げられること、宵宮場での神輿の位置も主神を思わせる場にあることなど樹下宮のもつ潜在能力を示す事柄が多い。その樹下宮の本殿直下に水が湧き、その水が境内を廻って坂本の町を流れる。その水路は山王祭における神輿のルートと一致している。井口、須原両氏はこれと断定することなく様々な考察や伝承をお話してくださった。

水の出自もしかり、名称が伝わっていないのは他ならぬ水（霊泉）であるからであろう。私はあえて表題に「樹下の水（このもとのみず）」と創作した。

近江の湧水探究は地元の仰木から始まった。ここで見るように地域の人々に崇められ、名称が存在する水に神仏の名を冠するものが多いことがわかる。探究をスタートさせた当初は「社寺仏閣に行けば何か手がかりが掴めるのでは」という予測から始まった。水道の蛇口をひねって水を使う我々には、何処に行けばきれいな飲める水にありつけるのか全く想像もつかない。逆に考えると水の湧き出る場所にこそ、自然に人々が集り、争いがおこらぬ様、崇め奉ったのではないだろうか。生命の源であり自然を崇拝する場となり、やがて畏敬の念を感じる場へと神格化して行ったのではなかろうか。そのような場所に後々、社や寺が建立されたに違いない。今日の成熟

外から本殿下の中空を覗く

樹下宮霊泉

樹下宮の裏手より

東本宮参道の横に十禅師馬場がある

した現代社会において何時自分が精神に病を患うかわからない。効率化やロジックが先行する時代であるからこそ、我々には「こころの拠りどころ」が必要なのである。水は皆のものであり、誰のものでもないのだと。

水脈があるのか近くから水が湧き出ている

樹下宮本殿

三、文明の水、文脈の水（ぶんめいのみず、ぶんみゃくのみず）―

美術家である私がアーティストステイトメント以外で文章表現することなど考えてもいなかった。そして元を返すと近江の湧水を探し出すことさえも想像していなかった。

美術家は自身で表現する「こと」を構想しテーマを決め、そこに材料や道具など必要なものを集めていく。ある程度の予想のもと自身の作品の展開を想像するのであるが、「近江の水をめぐる」は、予想の範疇を遥かに超えたと考える。自身の創作や考えがいかに周辺との様々な関係で成り立っており、ものづくりが自身だけのものではないということに気付かされた。

二〇〇七年の春にスイス、ジュネーヴで「全体-水（レマン湖-琵琶湖）」と題した作品を発表した。これは自然と人間の関係において文化的、歴史的背景の色濃い二つの湖水が溶け合い混ざる事で固有性が失われ、均質な水、科学的な水（H_2O）となる。その状態を一部始終みせることで「全体-水」と名付け作品化した。それはハイスピードでグローバル社会に突き進む中、固有性というものの在り方を問い直す意味がある。また水は地球上で生息する全てにとって無くてはならないものであり、誰のものでもないことを強く意識した作品である。

そして二〇一〇年の望遠展につづいて二〇一二年の自然学展覧会において近江の水源「全体-水」を表現する事になる。ここで私は名前がついている近江の湧水を汲む構想をすることになる。結果として一二〇ヵ所以上の水源を近江（滋賀県）から探し出すことになった。

二〇一二年八月の自然学展覧会とは私が所属する成安造形大学と英国のロンドン大学ゴールドスミスカレッジとの共同研究事業であり、その一環として滋賀県立近代美術館で展覧会が企

画され、出展作家として参加することとなった。そこで問われたのは、「今日における西洋を中心とした近代以降の美学、芸術学では捉えきれないと考える未来社会に対する芸術表現は、どのような態度を取るべきか」副題に「来るべき美学のために」と題され人類学やエコロジー生態学など様々な分野を横断的に捉えていく思考とその表現を提案することとなった。日本人が何時の時代も自然と対峙しながらも折り合いをつけ持続してきた感覚や自然をくらしの中から排除できない感覚を提案することになったと考えている。

その後、中心メンバーの岡田修二氏（画家）とジョン・レバック・ドリバー氏（サウンドアーティスト）の誘いを受け、二〇一三年二月に自然学英国展への出展と展開することとなる。

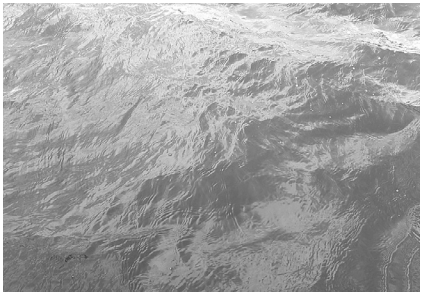
ここで私は「全体-水」構想の原点に立ち返るプランが脳裏を廻った。異なる二つの水、（琵琶湖の水とロンドンの水）を融合させることである。

英国ロンドンは産業革命を成功させ、近代文明の魁であることは言うまでもない。古代、エラトステネスが地球の大きさを求めることから始まったことに端を発し、地球という超自然物をグリッドで区切り、経線、緯線を設定し数値化した。そしてロンドンのグリニッジ子午線を基準とする経度表記が世界中で採用されている。これは今日に続くグローバリゼーションへと展開する原点と考えて良いだろう。そしてロンドン市外を貫き北海へと注ぐテムズ河は世界経済や政略図を生み出してきたインフラの象徴と言って良いだろう。

私は迷うことなくグリニッジ天文台を背後にテムズ河と交差する場所を選んだ。「ここで水を汲もう！」雪まじりの小雨の中、どんよりとした川岸を歩き手持ちのスマートフォンが経度0を示す場所をさまよった。ちょうど0度を示す位置に小さな土手が顔を覗かせているのを発見した。そこで日本から持込んだ金製の柄杓を使用して汲水する。琵琶湖の透き通るような水とは相反して鼠色一色であった。乾燥しており既に摂氏0度を下回っていた筈だが、何故か寒さを感じなかった。それは私にとってはロンドンの中で最も立ちたい場所であり見たい光景にほかならなかったからである。

さて、琵琶湖は何処で水を汲むべきか。順番ではこちらの水を先に汲み、それを持ってロンドンに行ったのであるが、こちらも相当迷ったのを思い出す。本来的には琵琶湖そのものが湧水であるから湖底に潜るのが自然だ。しかし背後にうつる景色や琵琶湖の穏やかさが伝わらない。迷ったあげく私が暮らす湖西側でなるべく近い場所を選んだ。中でも琵琶湖大橋以北で比良山系の麓はあちらこちらで湧水が湧いていており、比較的綺麗な水が流れ込んでいる。そして我々の拠り所でもあり琵琶湖周辺で何処でも目にすることができる神奈備山、三上山（近江富士）がはっきりと見える位置が望ましい。ズバリそのような

場所とは和邇川河口付近である。二月初旬の晴れた日、対岸とその向うまでクリアに見えた。湖水は細波（さざなみ）が立ち、湖底が透けるいつもの美しさの中、汲水した。


冬のテムズ河水面

琵琶湖の水を汲む

テムズ河の水を汲む

自然学英国展はロンドン大学ゴールドスミスカレッジの施設内で行われた。ここでゴールドスミスカレッジとはどのような性格の美術大学か簡単に説明したい。国立であり欧州を中心に世界各国から学位を取得しに学生が集る。中でも作品を成立させる為のコンセプトやロジック、文化的背景、社会背景、作家個人としてアイデンティティーが問われる。どちらかというと一般的に難関なイメージで受け止められる大学と捉えている。一九九〇年代にはこの美術学校の卒業生を中心とする作家がＦｒｅｅｚｅ（フリーズ／凍結、硬直?）と題した現代美術展を企画し世界中の美術関係者に衝撃（フリーズ）を与えた。当時私は彫刻を志す美大生でアカデミックな授業を受けながら世界

ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ

セントジェームス教会

ナショナルギャラリー

テートモダンよりセントポール寺院を望む。手前ミレニアムブリッジ

でおこるファインアート（現代美術）の動向を気にしていたのを覚えている。大学のキャンパスは煙突のあるロンドンらしい古い空き家になった家や教会を買い取り、ジェントリフィケーションを起こしている。さらに超近代的なガラスを主とした新建築の校舎と複合させ、新旧ハイブリッドな空気を漂わせている。

展覧会はその区域内のセントジェームス教会を使用した。ここは卒業制作展などが開催される場であり、学生が美術作家としてのビジネスをスタートさせる見本市会場のような性格をもつ場所らしい。私は学生の頃に夢見た場でアシスタントやキュレーターに指示を送りながらの作品のセッティングを経験し、展覧会に漕ぎ着けた瞬間は感慨深いものがあった。日本では考えられない私一人に与えられる空間や条件は今後の作家活動のキャリアになることは間違いない。岡田修二氏の琵琶湖の湖岸からモチーフを抜き出した絵画（グリザイユ技法／油彩古典技法）とジョン・レバック・ドリバー氏のサウンドアート（琵琶湖とロンドンの音を扱う作品）と私の「全体-水（テムズ河-琵琶湖）」が教会内に展示され自然学英国展は成立した。それは前述した通り二つの水の氷がプレートの上におかれ、ゆっくり溶け、混ざり合い何処の水でもない全体の水になる。

全体-水（テムズ河・琵琶湖）

水辺（油彩画·岡田修二氏作）の作品前でジョンドレックドリヴァー氏の音作品に合わせて舞踏するダンサー

後日、ナショナルギャラリーやテートモダンを訪れた。前者

はロンドンの中心と言って良いトラファルガー広場前、チャリングクロスにある。周囲にはビッグベン、ウエストミンスター教会がある。主として十三世紀から十九世紀までの宗教画から近代絵画をコレクションする美術館である。大英博物館もしかり、ヨーロッパ或いは世界の文化、科学、歴史変遷を、一手に引き受け編集する。「人間がつくりあげる世界の近代文化の中心ここに有り！」みたいな勢いを感じた。一方、後者のテートモダンは第二次大戦後の英国復興を支えて来た発電所跡をリノベーションした建築で、様々な現代の表現に対応できる美術館である。ここからの光景はテムズ河をミレニアムブリッジで渡し、対岸のセントポール大聖堂に通じている。これだけの世界の近現代文脈を一手に引き受け編集しながらも人間の拠り所としてきた寺院や教会（宗教）とセットになっている。その条件は決まって水辺であることは言うまでもない。

テートモダン最上階のカフェからセントポール大聖堂を望みながらふと想像してみた。琵琶湖を眼下に比叡山を望む我々の文化芸術の殿堂を…。

今日、我々が生かされ、脈々と受継がれる文化は先人が残してきた膨大な量の文脈の一端を引き継いでいることにほかならない。

近代文明が起って間もなく、その文脈主義は近年、より強さを増し現実とは甚だ乖離したところで、その猛威を振るっているように思う。そのリアルさが伴わない文脈はあげくの果てに「想定外の…」という始末だ。我々日本人は幾度となく自然の猛威にさらされ、或いは恩恵にあずかり共生してきた。自然と対峙してきた我々の自然観に想定内とか想定外という感覚は存在し得ないと私は考える。文明の利器に頼ってきた我々の豊かさとは何なのか、今こそ「豊かさ」を改める時期にきている。「手探り・身の丈」の感覚を超越した誰かの責任に任せるような時代、社会の終焉が迫っているのではなかろうか。

追記

二〇一二年十二月より二〇一六年九月まで滋賀県文化振興事業団が発行する「湖国と文化」に〝近江の水をめぐる〟と題して近江の湧水を写真と文で紹介する機会をあたえられた。本編十五回と番外編一回の計十六回の連載の機会をいただいた。十四回から十五回の二回分と番外編一回のオリジナル文章を可能な限り残し、近江学研究紀要として再編集した。紀要の冒頭は二〇一七年一月現在における私自身の現況報告から始め、次に美術家目線でこれまでに見た湧水の中から特筆すべき視点として「面白い水、難しい水」、連載最終回とあって、湧水に焦点をあてる始まりとなった地元の水と我々の依り代、元となる水として「始りの水、元の水」と題して焦点をあてた。番外編では美術作家の活動記録、自然学ロンドン展における自身の作

品の在り方やその意味と作品に込める思いを「文明の水、文脈の水」として発表した。

冒頭にも記したが近江における水研究は自己の造形表現から出発した。「近江の水をめぐる。」は近江学研究所の研究紀要として四回にわたって記す機会をいただいた。水源を辿ることは水脈を辿ることであり、それは今日まで受継がれ続く近江の暮らし、生業、そのものを辿ることであると考える。そこで育まれ産み出された知恵、工夫、感覚が近江の感性そのもののように思う。美術家であり造形表現を志す私にとってこの感性をしっかりと掴んで行きたいと考えている。世界都市「京都」の隣に位置し、様々な物資や情報の流通を直視し、今日を意識しながらも近江の足元の暮らしを保持してきた。絶えず次の社会の在り方をイメージしながら冷静に判断する感覚、感性は私の造形表現の探究に帰ってくる。水脈を追い続け水源を探すことを今後も持続したい。

寄人衆の役割に見る五箇祭

～多様なコミュニティが結び、支える祭礼の一事例～

加藤　賢治

寄人衆の役割に見る五箇祭
～多様なコミュニティが結び、支える祭礼の一事例～

加藤　賢治

Name :
KATO　Kenji

Title :
The part played by “yoritoshu” as seen in the Goka Festival-an example of a festival that brings together various communities in mutual support

Summary :
Goka Festival is a festival held in May in Shiga Prefecture in which “yoritoshu”, the group of people helping to carry out the festival, play an important role. When watching this local festival closely it is interesting to see that people from various neighboring communities are also involved. In this report I will examine the nature of the interrelations of small communities within a larger community.

はじめに

現在の大津市北部、旧志賀町のＪＲ志賀駅に程近い樹下神社を氏神とする、北船路集落、守山集落、木戸集落、荒川集落、大物集落は、西に急峻な比良連峰、東に琵琶湖を臨むという風光明媚な地域として知られる。この地域の南に位置する和邇荘、北の比良荘は、それぞれ和邇川、比良川が運んだ砂れきによる平地が広がるが、対象とする今回の地域は山裾から琵琶湖までの距離が短く、五つの集落は南北に細長く連なる特殊な地形の上に位置する。そして、現在は国道一六一号線、湖西バイパス、ＪＲ湖西線が民家の隙間を縫うように走っているが、近世には、北国海道（西近江路）という湖西を貫く幹線道路が敷かれていた。

この五つの集落の氏神である樹下神社では、例年五月五日に五箇祭（ごかまつり）という祭礼（本祭）が行われる。この祭礼の詳細については、主だった先行研究がほぼ存在せず、志賀町史（二〇〇二年）では、第二巻、第三節「くらしと宗教と文化」の項で「木戸庄と十禅師権現（樹下神社）」に神社の解説がされているが、五箇祭の詳しい記載は無い。

平成二八年（二〇一六）度の成安造形大学附属近江学研究所の「近江の道」をテーマとする研究の一環として、文化誌「近江学」第9号に掲載された対談記事「石出し車が行くみち　―神々と暮らしが交差する風景―」には、祭礼や石の積み出しに使われる「道」に焦点を当てながら、五箇祭の一連の流れが報告されている。筆者もその取材に関わり、堀内美緒氏による「滋賀県大津市木戸地区樹下神社に関する祭祀組織：寄人衆（よりとしゅう）について」（二〇〇七年　京都大学大学院農学研究科修士論文所収）、山形蓮氏による「歴史的観点から見た五箇祭について」（二〇〇九年）、同じく山形蓮氏編集のＤＶＤ『五箇祭』（二〇一〇年）などを参考にした。

今回、平成二八年の五箇祭を取材した。特に興味を覚えたものの一つは、堀内氏も着目しているが、祭礼において一定の役割を果たす「寄人衆（よりとしゅう）」の存在である。五箇祭は五つの集落によって行われ、近江の祭礼ではよく見られる典型的な郷村祭礼であるが、寄人衆は、五つの集落のうち、木戸、北船路、守山の三集落のみに存在し、世襲（代々寄人株を持つ）であるにもかかわらず人数も各集落で差がある（木戸・一軒、北船路・十四軒、守山・十七軒）。

もう一つは、筆者が昨年もテーマとした、祭礼に関わる古くからの住民と、新しく地域に移住してきた住民との関わりについてである。寄人衆の取材を中心に行った、守山集落のみ、新住民が神輿を担ぐという取り組みを実現させている。

今回の論考においては、この特筆すべき二点についてまとめてみた。

一、樹下神社と五箇祭

（ア）樹下神社と日吉山王権現との関わり

志賀町史（二〇〇二年）では、第二巻、第三節「くらしと宗教と文化」の項で「木戸庄と十禅師権現（樹下神社）」に五箇祭の中心となる樹下神社の解説があり、先ずは、神社の成り立ちを見てみたい。

現在の樹下神社（かつては十禅師権現）は、木戸荘の荘園鎮守社として勧請され、北船路、守山、木戸、荒川、大物という五ヵ村の氏神となっている。

一番宮	十禅師権現	本地地蔵菩薩	五ヶ村宮
二番宮	大八王子権現	本地千手観音	守山宮
	同北ノ方ニ小宮有り	三宮普賢菩薩	
	同南ノ方ニ大岩有り	牛ノ御神　大威徳神	
三番宮	聖真子権現	本地阿弥陀如来　歓喜寺	
		大物荒川　之宮	
四番宮	十二所権現	三十番神なり　七シウクワン	
		三十二人衆	
五番宮	地主権現	本地薬師如来	木戸宮

同北ノ方に小宮　八幡大菩薩　本地阿弥陀如来
南ノ方ニ　大行事宮　本地毘沙門天王
同小宮有り　八幡大菩薩　本地阿弥陀如来
同地蔵堂有り　これハ十禅師権現神宮寺なり
「木戸庄御宮之次第書」（中村勘左衛門家文書）慶長十八年（一六一三）

右記の通り、一番宮が十禅師権現（本地仏が地蔵菩薩）で五つの集落全体の祭神となっている。二番宮が八王子権現で本地仏が千手観音、三番宮が聖真子権現で本地仏が阿弥陀如来、五番宮が地主権現で本地仏が薬師如来であり、それぞれの集落の氏神となっていることがわかるが、権現という神と本地仏の名前を見ると、日吉大社の山王上七社と全く一致するのである。「木戸庄御宮之次第書」（中村勘左衛門家文書）は、慶長十八年（一六一三）に書かれているので、神仏習合の神号である日吉山王権現の旧称が使われているが、明治元年の神仏分離令以降は、完全に神と仏が離され、これも日吉山王権現と同じく、旧称の権現は使われなくなり、

十禅師権現（五ヵ村の神）→樹下神社
八王子権現（守山集落の神）→牛尾神社
聖真子権現（荒川・大物集落の神）→宇佐神社
地主権現（木戸集落の神）→地主神社（日吉大社では東本宮）

と、それぞれの地主神社を除いて、日吉大社の上七社と同じ名称がつけられ、現在の名称となっている。

また、同じく中村家文書「木戸庄御宮之次第書」には、四番宮の十二所権現に祀られる三十番神の記述が見られ、この神は神仏習合に裏付けられる法華経守護の一日一神を基準とした神であり、比叡山延暦寺と習合した日吉大社とのつながりをここでも感じるのである。

（イ）北船路集落の八所神社

そして最も興味深いのは、北船路集落の神である。北船路集落は、五箇祭に参加する集落の一つであるが、唯一、樹下神社境内に集落の社は無く、集落内の八所神社に鎮座する。この八所神社もまた深く日吉山王権現と結びついている。

「北船路行麿由緒記」（叡山文庫）によると、元亀二年（一五七一）織田信長による比叡山の焼き討ちの際、麓の坂本の日吉大社も大きな被害を受けたが、その日吉大社を粉骨砕身の努力で復興させたという祝部行丸（生源寺行麿）が、日吉大社を追われ、比叡山門領であった北船路村にしばらく滞在し、一時期、山王祭をこの地で催行したと伝えられている。

現在も、日吉山王祭では、最終日の四月十五日に行われる酉の神事に、北船路八所神社の村役人が、西本宮に参列し、船路御供の献納を行っている。

八所神社の祭神は、白山菊理姫神と大己貴神で、いずれも山王上七社に現れる西本宮系の神で、これらの神が、五箇祭の当

日に樹下神社に迎え入れられるという流れは大変興味深い。

二、五箇祭りにおける寄人衆の役割

（ア）女神を迎え入れる五箇祭

五箇祭自体がいつ頃から始められていたのかという資料は乏しいが、延宝五年（一六七七）の「木戸五ヶ村四月一番之酉神事次第書」に記述が見える。しかし、五箇祭といつ頃から呼ばれていたのか、また、いつ頃から現在の形に至ったのかは、わからないのが現状である。

ただ、先述の通り、現在の神社の名称や、かつてこの地域が比叡山門領であったことなどを考えると、間違いなく日吉山王権現との深い結びつきがあり、祭礼のかたちにも祝部行丸（生源寺行麿）の伝承が何らかのかたちでこの祭礼の深部に現れているように思える。

現在の五箇祭の主な筋書きは、北船路の女神（白山菊理姫神）を無事に樹下神社境内に迎え入れ、最後に見送るというところであり、その女神が通る「道」を大切に扱う。

そして、祭のために整備されたその「道」を、神輿が無事に往来できるように確認するという「寄人衆（よりとしゅう）」の存在が注目される。

（イ）五箇祭における寄人衆と番人衆（ばんどしゅう）

「寄人衆」は、木戸集落に一軒（一名）、北船路集落に十四軒（十四名）、守山集落に十七軒（十七名）の合計三二軒（三二名）で構成されている。世襲というかたちで、代々その家長が寄人を受け継ぐが、家長は寄人株を所有していることが前提で、売買することも可能である。株は、守山集落の場合、一枚四畝一〇歩の山四枚で寄人の一株とされている。神輿など祭礼で費用がかさむ場合にこの寄人株の財産が使用される仕組みになっている。

そして、寄人三二名のうち、寄人株を持った古い順から十名を「番人衆（ばんどしゅう）」と呼び、年に一度「カクセツ（格節）」という寄り合いがもたれる。その十名の番人衆は順番で当番が決められ、当番の家で小正月（例年一月十五日）に「カクセツ（格節）」が行われる。

カクセツの日には、当番家に、寄人衆の守護神であると言われる樹下神社の境内の十二社神社の掛け軸や、三十番神の御札などが飾られ、お供え物は、榊、洗米、塩、尾頭付きの鯛一匹。当番家の家長の挨拶と、三献の後、膳が運ばれ飲食が行われる。

現在のカクセツはこれ以上のことはないようであるが、かつては、寄人株の名簿の確認や、寄人衆の揉め事などの話し合いもされていたと推測される。

（ウ）五箇祭における寄人衆の役割

・バンバ改めの儀式

本祭の前日、五月四日に「バンバ改め」という寄人衆が集まって行われる重要な集まりが行われる。バンバ（馬場）とは、樹下神社から参道を琵琶湖に向かって下り、琵琶湖に出たところの浜一帯の名称であり、五箇祭においては、御旅所に繋がる場所であり、最後の見せ場の舞台となる重要な場所である。その場所（バンバ）が綺麗に整備されているかどうかを確認することを「バンバ改め」という（写真1）。

平成二八年五月四日の「バンバ改め」は午後四時から、木戸公民館の二階の広間で行われた。正面の床の間に、「樹下皇大神」の掛け軸と、神棚が設置され、その前に寄人衆が年齢の順番に座する。向かって左の列が守山集落で、右が北船路集落である。ブク（服）と呼ばれる喪中の者は参加できないので、守山集落の寄人衆は、本来十七名のところ十名の参加、北船路集落は十四名のところ六名、木戸集落は一名のところ〇名（参加なし）の参加であった。その内、古株である番人衆は本来十名のところ、四名が参加されていた（写真2）。

写真1：琵琶湖の手前の砂地一帯を「バンバ（馬場）」と呼ぶ

全員揃ったところで、守山、北船路それぞれの寄人衆の若手が、この日の欠席者（ブクを含む）を紹介して、出席者を確認する。この日は、新しい顔が複数あったので、特別に自己紹介が行われ、本来は寄人株を持つ家長が出席しなければならないが、家長の代わりにその長子が出席したとの紹介などもあった。その後、この場を準備している木戸集落のキモイリ（肝煎）二名が挨拶をして、三献を行い、膳（この日は弁当、最近は弁当が用意されているが、かつて二〇年ほど前は豪華な料理が出ていたようである）が用意され会食が始まる。

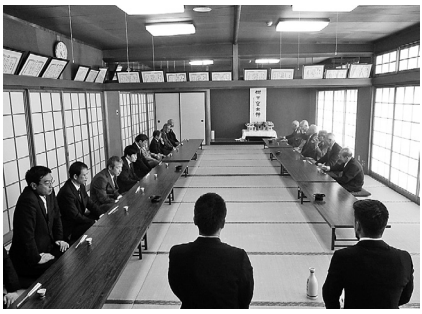


写真2：木戸公民館の2階　向かって右が北船路、左が守山の寄人衆　手前2名が木戸のキモイリ（肝煎）

木戸集落のキモイリ二名は、二手に分かれてビールを注ぎながら、和やかな雰囲気をつくる。四〇分ほど経過したところで、若手がしめ縄とともに、そこにつける御幣の準備を始めた（写真3）。そして、会食が開始されてから、一時間ほどすると、若手中心の寄人たちがほぼ全員で、バンバ改めに出発する。

バンバ改めでは、神輿が問題なく通過できるかどうかを確かめるため、バンバの溝蓋や、水たまり、デコボコ、また、神輿の屋根を傷つけないかということで参道の両脇の木々の枝張りまでを確認することが主な任務となる。しかし、近年、参道はアスファルトで固められ、溝蓋もコンクリートまたは金属となっているため、改めての確認の必要はないようであった（写真４）。

ただ、御旅所の砂地の確認は全員で慎重に行われ、神域を示すしめ縄が張られ、公民館でつくられた御幣が丁寧に取り付けられた（写真５）。

御旅所の準備が「バンバ改め」における寄人衆の仕事であるようであったが、終了後、公民館に戻ると、最後の儀式が行われる。「バンバ改め」の結果報告である。

この日は、「明日の本祭の準備は滞りなく終わりました。特に問題はありませんでした」と報告され、この儀式も無事終了した（写真６）。

現在では、この「バンバ改め」の儀式は形式的に行われているが、本来のこの儀式はかつて祭礼を行う上で大変重要であったという。

実は、このバンバ及び参道の整備は、その場所を集落の一部とする木戸集落の氏子の仕事であり、五月四日までに完璧に整備をしておかなければならない。「バンバ改め」において、バンバや参道に「不備あり」と寄人衆が指摘すると、その報告が直ちに木戸集落の氏子総代に伝えられ、木戸集落の氏子たちが総出でその不備を改善しなければなら

写真４：しめ縄を手にバンバに向かう寄人衆

写真３：しめ縄につける御幣をつくる守山の寄人衆

写真６：「バンバ改め」の報告

写真５：寄人衆によって綺麗にしめ縄が張られた御旅所

ない。かつては、一晩かけてその不備を正すなどしたことがあると寄人衆の長老格である番人衆から話が出ていた。

要するに、寄人衆が、木戸集落の氏子によって行われるバンバや参道の整備が、できていないことを理由にこの祭礼を止めさせるという権限を持っていたとも言えるのである。

午後七時頃、問題がなければ解散となる。木戸集落のキモイリは、木戸集落の氏子総代に「バンバ改め」の無事を報告。守山集落の寄人衆は、集落の氏神である若宮神社に出向き、その参道に置かれた太鼓を叩く。それが、祭礼開始の合図となって、各家の提灯に灯りが灯るのである（写真7）。北船路集落の寄人衆は、集落の中心にある神輿倉に出向き、神輿出しを見届ける。日吉大社の神職によるお祓いがあり、集まった多くの担ぎ手によって神輿が出され、八所神社へと向かう（写真8）。八所神社の鳥居の前では、「わっしょい」の大きな掛け声とともに国道一六一号を跨いで何度も往復する所作に迫力がある。そして、午後九時、神社の拝殿に上げられ、集落の担当者は徹夜で神輿の守りをするのである（写真9）。

写真7：守山の寄人衆がバンバ改めの無事を告げ、祭りの始まりを知らせる太鼓が鳴る

・寄人衆の役割

寄人衆は、一見バンバや参道の点検のみを担当する集団とも見えるのだが、それぞれが株を持って世襲で受け継いでいることや、整備の不備を理由に祭礼の催行に影響を与えることができる。また、寄人衆の中に、番人衆と呼ばれる長老格の存在があるなど、五箇祭全体においても非常に大きな力を持っている。

寄人衆は、五箇祭全体の役職であるが、記述の通り、構成員は北船路十四名、守山集落十七名、木戸集落一名というように偏っている。これは、日吉大社とのつながりの中で、北船

写真8：北船路集落の神輿の倉出し

写真9：無事八所神社の拝殿に北船路集落の神輿があげられる

路集落の神輿を別格として、木戸集落の樹下神社に迎え入れるという形を重視したためとも考えられる。寄人衆が三二名であるというその数が、神輿一基を担ぐ時の適正な人数であることを考えると、かつて、北船路の神輿を樹下神社に担ぎこんだ人たちが寄人衆の起源であるとも想像できる。これは、あくまでも想像の域を超えないが、何れにしても、五箇祭における寄人衆の役割は重要であるということが言えよう。

（エ）五箇祭当日

・北船路の女神の迎え入れ

五月五日の午前六時前、「卯の刻」、北船路八所神社の神輿が樹下神社に向かって威勢良く出発する。二〇〇メートルほどまっすぐ、琵琶湖へ出る（写真10）。そこでトラックに積んで、大太鼓を先頭に湖岸の道をゆっくり北へ進む。

十五分ほど進むと、守山集落の「シマ」と呼ばれる場所に到着。そこに守山集落の氏子たちが、迎えの挨拶に来ている。

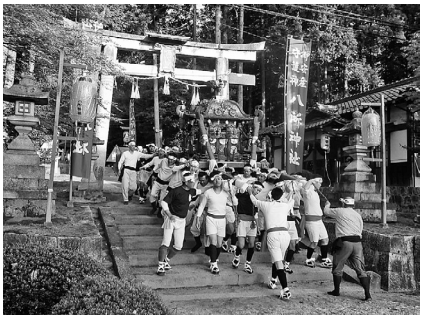


写真10：５月５日の早朝八所神社を出る北船路の神輿

写真11：守山集落の「シマ」で担ぎ手が北船路の神輿を迎える

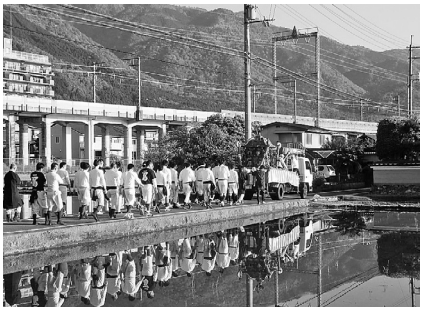


写真11-1：比良山系を背後に樹下神社に向かう神輿

そして、神輿の担ぎ手十数名がこの北船路の神輿を担ぐために同行する（写真11）。実は、かつて神輿を担いでいた頃は、この場所まで、北船路集落の氏子が担ぎ、ここから守山集落の担ぎ手に交代して、木戸集落の樹下神社の一の鳥居まで担いでいたという。現在は、トラックに積まれているため、守山集落の担ぎ手は後ろについて歩くのである（写真11-1）。

また、十五分ほど北へ進むと、木戸のバンバ（馬場）である。そのバンバに入る入り口を「バンバサキ」と呼ぶが、そこには、木戸集落の大太鼓が、北船路集落の大太鼓を迎えに来ており、二つの太鼓を合わせる「太鼓挨拶」が行われる（写真12）。

バンバサキから、神輿は担がれるが、そこから樹下神社の一

の鳥居までは守山集落の担ぎ手が担ぐ。そして、一の鳥居から樹下神社までは、木戸集落の担ぎ手が担ぐ（写真13）。最後は再び北船路集落の担ぎ手に変わって境内に進む。午前六時五〇分、境内では大物集落の神輿が待ち構えており、神輿同士が鼻を合わせると一気に二つの神輿が拝殿に駆け上る。大物集落の神輿の神様は男神（北船路の婿さん）であり、早朝に女神を迎え入れるという儀式がこの鼻合わせだとも言われている（写真14）（写真15）。俗説ではあるが、これも、日吉大社の山王祭における午の神事に見られる「神様の結婚」を意識して行われてきたのかもしれない。二基の神輿は拝殿に置かれた後、一旦全員解散となる。

　このように、五月五日の早朝は、北船路の神輿を、守山、木戸、大物の各集落が丁寧に迎えるという儀式となっている。

・北船路、守山集落の氏子たちの樹下神社入り

　午後三時前、守山集落では若宮神社に、祭礼に参加する全員が集合する。守山自治会の自治会長、副会長、会計の三役、氏子会の氏子総代、副総代、裃を着た八人衆、紋付の六人衆、肝煎（各家の長男が順番で担当する。毎年交代で、役割は集落の代表として挨拶を行ったりする）、金棒引き（行列の先頭を歩く真っ赤で派手な衣装を着け

写真13：一の鳥居までは守山の担ぎ手が北船路の神輿を担ぐ

写真12：バンバサキでの「太鼓挨拶」

写真15：２基の神輿が一気に駆け上がり拝殿に上がる

写真14：樹下神社境内に待っていた大物の神輿（男神）と迎え入れられた北船路の神輿（女神）が鼻を合わせる

た二五歳までの男子二名。彼らは山調方という氏子集団に属す。第三項で詳細を記す）、宿親（山調方の世話役。金棒引き衣装や飲食など、前日や当日に様々な世話をする役）、そして神輿の担ぎ手などが集まる（写真16）。

午後三時過ぎ、北船路集落の同じく祭礼に参加する行列が、一本琵琶湖側（東側）の道を通過した時点で、樹下神社に向かって歩き出す（写真17）。

三時三〇分、北国海道を北上し、木戸集落へ入る手前の北野という場所で「北野の挨拶」が行われる。北船路集落が先に到着し、守山集落を迎え入れ、肝煎同士が挨拶を交わすというものである。挨拶は儀礼的で、ある種の儀式であるが、初めて担当するもの同士が無言で行う所作に緊張感が漂う。この儀式は、この日の早朝、北船路の神輿を守山の神輿担ぎがお手伝いをしたお礼の挨拶だといわれている（写真18）。

四時前に、北船路、守山集落の一行は、一旦樹下神社にお参り（宮入り）をし、木戸、大物、荒川集落も同じく、神社に参拝する（写真19）。

四時三〇分、樹下神社から琵琶湖側へ少し下った「中西の辻」と呼ばれるところに、肝煎と神輿担ぎが集合し、祭りが最も盛り上がる神輿渡御の始まりを合図する「五箇の挨拶」が行われる（写真20）（写真21）。

準備が整うと、交差点の南の辻に立つ守山集落の肝煎

写真17：歩き出す守山の神輿担ぎ

写真16：若宮神社の参道前に集合する守山集落の氏子たち

写真19：金棒引きを先頭に各集落の氏子が樹下神社へ一旦宮入する

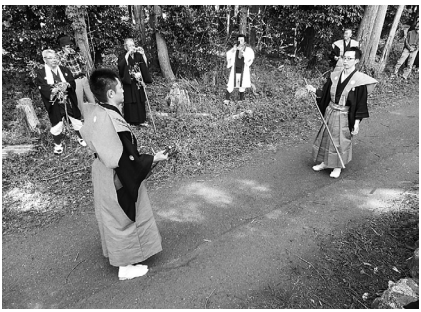


写真18：「北野の挨拶」左が北船路、右が守山のキモイリ（肝煎）

が「準備が整いましたがいかがいたしましょうか」と大声で伺いを立てると木戸集落の肝煎が「では行いましょう。催行いたします」と掛け声をかけて、神輿渡御が始まるのである。いずれかの集落が中心となっているのではなく、みんなで確認しあい、伺いを立ててから、物事を進めるというような儀式のあり方は、非常に奥ゆかしく、日本的な共同体の形成の知恵ともいえようか。

・神輿渡御

参道を神輿担ぎたちが肩を組んで待機し、機会を図って、一気に境内に駆け込み、拝殿から神輿を降ろすのである。その際、神輿を大きく揺さぶるその所作は勇壮で、五箇祭の一番の見所であろうか（写真22）（写真23）。神輿は、一旦境内に置かれ、入念に飾り付けがされる。その後、順番に御旅所へと出発する。各集落とも神社を出た鳥居前で、「わっしょいわっしょい」と掛け声を掛け、大きく神輿を担ぎ上げるという見せ場がある。そしてそのあとはトラックへ乗せて、御旅所へ移動する（写真24）。

神輿担ぎが神社へ入り「拝殿出し」をする順番は、木戸、守山、荒川、大物、北船路で、神社から神輿が出る順番は、木戸、守山、大物、北船路、荒川となっている。この順番も興味深い。神輿担ぎが入る順番は、北船路が最後になっており、拝殿から降ろす際、女神である北船

写真21：「五箇の挨拶」竹の棒を横にして話す守山のキモイリ

写真20：宮入の後、参道を琵琶湖よりに坂を下り中西の辻に全集落の氏子が集合

写真23：拝殿で大きく揺さぶられる神輿

写真22：肩を組んで境内に入るのを待つ神輿担ぎたち

路の神輿のみ、大きな揺さぶりなしで最後に粛々と行われる。神社から神輿が出る順番は、大物の男神の後に、北船路の女神が続き、それを見守るように、最後に荒川集落の神輿が続くのである。

・還御、バンバの別れ

午後六時、御旅所に五基の神輿が勢ぞろいし、神事の後、神楽などが催され、一時を過ごす（写真25）。

六時三〇分、木戸、守山、荒川、大物の神輿がまず神社へ向かって還御するが、北船路は最後に動き出す。木戸のバンバでは、先に木戸の神輿は、樹下神社の参道に入るが、守山の神輿は、バンバサキと呼ばれる樹下神社の参道へ向かうバンバの出口付近で待機。荒川と大物の神輿は、北船路の神輿を待ち構える。そして北船路の神輿が、少し大回りをして琵琶湖の水際近くにさしかかった瞬間、荒川、大物の二基の神輿が背後に回って追いかけるのである。そして、勇壮に動きながら北船路の神輿は、バンバサキから早朝にやってきた湖岸の道に入るのである（写真26）（写真27）（写真28）。

この所作は、北船路の神輿との別れを惜しむものであると言われ、祭礼の最後を飾る催事である。見物人も神輿担ぎも祭礼関係者も一気に盛り上がり最高潮を迎えるのであるが、夕刻の琵琶湖と山並みを背景に美しくも少

写真25：御旅所に勢ぞろいする神輿

写真24：各集落の神輿は、境内で飾り付けの後、渡御へ向かうが、その前に樹下神社前を勇壮に練り歩く

写真27：バンバサキで別れを告げる神輿（神）たち

写真26：バンバに出た北船路、大物、荒川の神輿

し物悲しい幕切れにも見えるのは不思議である。

五箇祭はこのようにして終了するのであるが、全体を俯瞰してみると、終始北船路集落の女神を乗せた神輿を如何に迎え入れ、送り出すのかという流れになっている。そして、本章（ウ）「五箇祭における寄人衆の役割」で述べたように寄人衆がバンバや参道の点検としながら、祭の催行に対して大きな権限を有するという役割も注目され、祭礼の歴史や背景を考える時に特筆されるであろう。

写真28：左が北船路の神輿、早朝やって来た道に戻る

五箇の挨拶も、守山集落のキモイリ（肝煎）が、準備ができたので如何しましょうという投げかけを行うことは、北船路集落を支えてここまでやってきたという守山集落の自負であるかもしれない。

やはり、この祭礼は、かつて比叡山門領であったという地域の歴史と、日吉大社とのつながりが、過去に大きく影響していたと言わざるをえないと考えられる。

今回は、守山集落を中心に祭を見てきたが、守山集落の中には、この祭礼を中心としながら、様々な共同体（コミュニティ）が重層的に存在している。次項ではそのことにも触れてみたいと思う。

三、守山集落における多様なコミュニティ

（ア）守山集落の氏子

守山集落は、行政区画では大津市八屋戸に含まれ、南に北船路自治会が、北に守山自治会がある。守山自治会は約二四〇戸で構成され、約三分の二が新興住民で、残りが古くからの集落（ここでいう守山集落）である。

守山集落は、六八戸あり、これらは樹下神社境内の牛尾宮と、集落内の若宮神社の氏子となっている。

氏子たちは、氏子会をつくって総代一名と副総代二名を置き、以下のような組織をつくって、五箇祭やその他の年中行事を行っている。

・寄人衆（番人衆とともに五箇祭全体の役の一つ。氏子会の組織ではない）

十七名。寄人株を持つ家で世襲。五箇祭で、北船路の神輿が通る道やバンバ、樹下神社の参道を点検する役割を持つ。また、守山集落の神輿の飾り付けを行う。祭礼の前日「バンバ改め」に出席しなければならない。年に一度カクセツ（格節）という集まりを開催する。

・番人衆（寄人衆とともに五箇祭全体の役の一つ。氏子会の組織ではない）
寄人衆の長老格。寄人株を持つ寄人衆の株入りの古い順に、番人衆となる。年に一度、小正月に、他の集落の寄人衆とともに、カクセツ（格節）という集まりを開く。

・山調方（さんちょうがた）
人数の規定はない。現在八名。氏子会の役。高校一年生から二五歳までの男子が対象。かつては、青年会が盆踊りなども企画したが、今では自治会が対応している。五箇祭においては神輿渡御（神輿担ぎ）など重責を担っている。ただ、現在では、人数が減ってきたため、五箇祭においては金棒引きと呼ばれる行列の先頭を歩く若衆（年齢順で二名）を担当するなどの役割にとどまっている。

・八人衆
八名。氏子会の役員。六人衆の上に立ち、満六〇歳になる年の一月十六日までその役につく。氏子会の行事としては、集落内の若宮神社と金毘羅宮の神事があり、六人衆とともに行う。若宮神社の神事は、氏神としてのものであるが、金毘羅宮は、守山集落の水害に対する治水や、かつて石や柴を切り出し、水運を使って運搬した歴史から、水運の守り神として祀られており、この地域独自の神事がおこなわれている。

それとは別に、山の神の神事がある。この神事は八人衆のみが執り行うもので、十一月と一月に山の神の祠の前で、大きな火を焚く、どんど（左義長）を執り行う。

・六人衆
六名。満四二歳になると入る。かつて集落の共有林を中心とした山の管理など、独自の役割があったが、現在は八人衆とともに、氏子会の神事を担当している。五箇祭では一名から二名が太鼓の番をするという役割を担う。

以上が、守山集落の氏子たちの役割とも言える。いずれのものも、一定の年齢に達すると必ず、何か集落の役割を担わなければならない。

（イ）守山自治会と「さっさの会」
※（さっさとは、神輿を担ぐ際に、勢いよく両手を伸ばして担ぎ上げる所作のことを言う）

・守山自治会
守山集落の古くから居住する住民のコミュニティを紹介してきたが、既述の通りこの守山地区には、新たにこの地域に入ってきた新住民（守山集落の三分の二を占める）の存在がある。現代においては、行政区の単位として、自治会が形成され、新住民も古くからの居住者も自治会員であることには間違いない。

そして、守山自治会が組織され自治会長がその自治会をまとめる。この自治会の存在は、他の集落においても変わりなく、基本的には古くからの住民と新住民も含めて自治会長が選ばれる。しかし、守山地区においては、自治会長と副会長は、古くからの居住者が順番に担当し、会計は新住民が担当するということになっている。要するに、新住民は今のところ自治会長、副会長にはなれないという不平等がある。ただ、この制度に対して、新住民からの不満の声は上がらない。

結果として、五箇祭の際、神輿の渡御などの祭礼に対して、守山自治会の自治会長と副会長（古くからの住民で氏子会の会員であるため）が、氏子総代とともに、責任を負うというかたちが可能となるのである。

・さっさの会

このことによって、守山集落に「さっさの会」というコミュニティをつくることができたのである。この会は、新住民による神輿を担ぐための会であり、自治会の下部組織となっている。おそらく他の集落には見られない集団で、神輿の担ぎ手が少なくなってきたという理由にとどまらず、新住民の地縁的なコミュニティを創出する目的も見られる。

五箇祭に参加する他の集落では、神輿の担ぎ手に苦慮しながらも、担ぎ手はあくまでも神事であるため、氏子会の会員に限らざるを得ない。古くからの共有財産の問題などもあり、複雑な理由が各集落にある。新住民に一時的に助けを借りることはあっても、組織的に担ぎ手に加わってもらうことは難しい。

しかし、守山集落においては、自治会長と副会長が古くからの住民であり、祭礼を含む守山地区のすべてを担っているため、自治会の下部組織として新住民が組織をつくって神輿を担ぐことが可能となったのである。

このようにして「さっさの会」は、平成十九年四月に発足した。当初は、三〇代後半から四〇代の新住民の男性十九名がこの会に参加、現在は、三〇名を超えている。

五月三日の肩組に参加し、五箇祭当日は守山集落

写真29：祭りの後のナオライ（直会）で、古くからの集落の担ぎ手と「さっさの会」の会員が親しく杯を交わす

写真30：五箇祭守山地区の「さっさの会」が加わる神輿（樹下神社前）

の氏子会の神輿担ぎの人々とともにさっさの会のメンバーが加わって、神輿渡御に参加するのである（写真29）（写真30）。

・さっさの会の会員の声

さっさの会の会員である金澤篤さんという四二歳の男性に話を伺う機会を持った。

金澤氏は、平成十五年二月にこの守山地区に転居してきた。守山自治会員として地域の取り組みに参加する中で、木戸小学校区の運動会や、ソフトボール大会に出場した時、さっさの会の存在を知り、会員の一人から勧誘を受けて平成二三年に入会。

入会しようと思った理由の一つは、もともと小学校の時から、野球をやっていたので、日常的に体を動かすことが好きで、学区の運動会など以外にもお祭りで神輿を担ぐということに興味を持ったこと。もう一つは、自分に子供ができたので、自分と同世代で家族を持つ人たちとの交流が少しでもできればと思ったこと。

そして、一番大きな理由は、この地である程度長く、できれば、一生暮らしたいと思っていたので、地域の祭礼に関わることは、大切であると思ったこと。という三つの理由によるということであった。

また、新しくこの地域に入ってきて、さっさの会に入会する人は、概ねこのように考えていると思う。とも付け加えられた。

現在、さっさの会の名簿は三〇名を超えるが、普段連絡を取り合うＬＩＮＥ（スマートフォンを中心とした通信アプリケーション）のグループは十二名で構成されている。この十二名の年齢構成は、三〇代から六〇代と幅広い。

五箇祭で神輿を一緒に担ぐ、氏子会の人たちとの交流は、自然なかたちで行われるが、祭礼は氏子たちが支えてきたものであるという意識が、氏子会の方にもさっさの会の会員にもあり、さっさの会のメンバーは、できるだけ祭礼には出しゃばらないようにしている。という感想も聞かれた。少し以前は、神輿の渡御に関して、神輿の飾り付けや、担ぐことができる範囲（参道における場所）があるなど、さっさの会が参加可能な事柄に少し制限があったそうであるが、現在、それは無くなり、神輿渡御に関しては概ねすべてにおいて参加することが許されていると思う。ということであった。

このようにして見てみると、さっさの会というコミュニティは、単に神輿を担ぐお手伝いをする集団ではなく、そのことをきっかけとして、学区の運動会やソフトボール大会にもつながり、同時に、八人衆や山調方など氏子会の伝統のコミュニティにも触れながら、この地域に暮らすという一つの大きなアイデンティティの形成に寄与していることが理解できた。

まとめ

今回の報告においては、一つに五箇祭における寄人衆という

独特な組織の役割を通して、祭礼の性格を分析してみた。この祭礼は、五つの集落が木戸集落の樹下神社を中心に執り行われる一般的な郷祭であり、例えば周辺地域の和邇地区や仰木地区の郷祭に共通する日吉大社の影響を見ることができる。

特に、この五箇祭では、北船路集落に伝わる祝部行丸伝説や、樹下神社境内の祠の名称などから、他地域よりも日吉大社との関わりが深く、祭礼の催行のかたちからもそれが理解できた。

五箇祭は、北船路集落の女神を迎え入れるために、木戸集落が五月五日のハレの日までに、神社の境内や、参道、そして最も重要な御旅所とバンバを美しく整備するのである。北船路、守山集落の寄人衆が、協力し、責任を持って点検、確認する。当日は、大物集落の男神が女神を迎え入れ、最後は、荒川集落の神も加わってバンバで送り出すのである。北船路の女神が、年に一度、樹下神社に出向き無事帰ってくるという祭礼を成功させるため、近世から受け継がれてきたであろう五つの集落の共同体が一つとなるのである。

そして、一方、守山集落に目を向けると、古くから祭礼を受け継ぐ共同体である氏子会が、山調方や八人衆、六人衆というコミュニティを形成しながら、山の神や金毘羅宮の小さな祭礼を行い、新興住宅に住む住民たちは「さっさの会」という五箇祭において、守山集落の神輿を担ぐための新住民によるコミュニティがつくられていた。

近代化が浸透していく中で、日本の集落もその波にのまれ、地縁・血縁的なコミュニティ（共同体）が分断されてきた。ただ、祭礼を伴う民間信仰においてそのささやかなる共同体が受け継がれてはきているが、大方の地域においてそのコミュニティも希薄になりつつある。

現代においては、そのような共同体の必要性が様々な方面から訴えられている。そのような中で、守山地区における、自治会の下部組織として新住民がさっさの会という組織をつくり、五箇祭の神輿を担いでいるという事実は、筆者が、これまで調査した集落に見ることがなかった事例として特筆される。また、さっさの会の会員の聞き取りにおいて、伝統の祭礼を受け継いできた古くからの住民へ対する畏敬の眼差しが、この新旧組織のつながりにおいて大変重要な要素であると理解できた。

哲学者の内山節氏は著書『共同体の基礎理論』の中で、「たとえばAさんはある企業という小さな集団に属しているとしよう。そのことによって企業人としての習慣を身につける。ところが家に帰ると、Aさんは地域づくりをする小さな集団にも属しているとする。そうするとこのグループを介した精神の習慣も、身につける。さらに、土曜日には趣味のグループのところにでかける。日曜日には教会にいく。」と、一人の人間が複数の違ったコミュニティに身を置くことの重要性を語っている。複数のコミュニティの精神の習慣を身につけることによって自分自身が多様性を獲得し、複雑な社会の中で展開される事象に対応できるようになると指摘している。

また、取材をする中で、古くからの住民の方から、「我々は、血縁、地縁のコミュニティに身を置くが、好縁のコミュニティも大切だ」という意見も聞いた。好き者同士が集まる集団は、自らがやろうとする意思がある前提であるため、その集団の結束は固いが、地縁・血縁のコミュニティは代々続いてきたということでつながるが、その維持には難しいところがあるのかもしれない。

現代において、コミュニティをどのようにつくり、維持していくのかという大きな課題は、今回のような報告で片付けられるものではない。より良きコミュニティ（共同体）のあり方を今後も考え、事例を集めることによって見えてくるものを発信していかねばならないことをこの調査で改めて感じた。

最後になりましたが、この調査について、貴重なお時間を割いてくださった守山集落の石塚政孝さん、守山集落さっさの会の金澤篤さんにこの紙面をお借りしてお礼申しあげます。

参考文献

・堀内美緒「滋賀県大津市木戸地区樹下神社に関する祭祀組織：寄人衆（よりとしゅう）について」（京都大学大学院農学研究科修士論文所収　二〇〇七年）
・山形蓮「歴史的観点から見た五箇祭について」（二〇〇九年）
・志賀町史第二巻（志賀町史編集委員会編　一九九九年）
・内山節『共同体の基礎理論―自然と人間の基層から』（農山漁村文化協会　二〇一〇年）
・加藤賢治「村座と祭礼―滋賀県大津市仰木地区の例―」（近江地方史研究第四四号　二〇一〇年）
・加藤賢治「宮座の祭礼～今堅田に伝わる祭礼　野神祭りに見られる現状～」（成安造形大学附属近江学研究所紀要1号　二〇一二年）
・加藤賢治「古式祭礼に見るコミュニティとそこに展開するコミュニケーション―大津市今堅田一丁目の愛宕講と地蔵講を中心に―」（成安造形大学附属近江学研究所紀要3号　二〇一四年）
・加藤賢治「御所山のお火焚き」（成安造形大学附属近江学研究所紀要4号　二〇一五年）

「大森鉄之助の物語」

滋賀から仏領ニューカレドニア、そしてパリへ

津田　睦美

「大森鉄之助の物語」

滋賀から仏領ニューカレドニア、そしてパリへ

津田　睦美

Name :
TSUDA　Mutsumi

Title :
The Tale of Tetsunosuke Omori: From Shiga to New Caledonia to Paris, France

Summary :
This is the story of Tetsunosuke Omori, who was born in Samegai, Maibara into a family that made “butsudan”(Buddhist shelves).
In 1914, Omori went to New Caledonia to work in the nickel mines as a contract laborer. With the advent of the economic crisis after the WWl, he lost his job and decided to join the French army, moving to France.

はじめに

戦前、滋賀県から仏領ニューカレドニアに契約移民として出稼ぎに渡った人は、仲介役を担った移民会社の記録によるとわずか七九名である［表1］。そのなかで特に私が興味を持ったのは、醒ケ井（米原市）上丹生の木地師の家に生まれた大森鉄之助という人物である。

彼について詳しく知るきっかけになったのは、角田房子氏が、一九六一年に文藝春秋に寄稿した「たんぽぽ鉄之介」というルポルタージュである。当時、角田氏は毎日新聞パリ支局長夫人としてパリに滞在し、第一次世界大戦でフランス義勇兵となった日本人について調べていた。どういうきっかけで知り合ったのかはわからないが、彼女は鉄之助に何度か会って聞いた話をベースにその破天荒な人生を生き生きと描いている。

この話は、後に『さまよう愛国心』（一九六一年文芸春秋新社）という単行本の中におさめられ、彼女が日本の近現代史をあつかうノンフィクション作家として執筆をはじめる、ほぼ最初の仕事だったのではないかと思う。

鉄之助が語る話の信憑性は公文書ではとうてい確認できるよ

うなものではないが、何度も厳しい人生の節目を乗り越えた人ならではの魅力にあふれている。本稿では角田氏のテキストを引用し、醒ケ井からニューカレドニアを経てパリへと足をのばし、ふたつの大戦に翻弄されながら果敢に生きた鉄之助の人生をたどってみたい。

一、滋賀から仏領ニューカレドニアへ

大森鉄之助は明治二四年（一八九一）四月、滋賀県坂田郡醒ケ井村大字上丹生の木地師の家に生まれた。上丹生は醒ケ井から南に進み、丹生川と宗谷川の交わったところにある地域で、農業には向かないこともあって、山林からとれる木材を原料にして、大工、木挽き、指物、彫刻、仏壇、木地などで生計をたててきた。

木地師であった鉄之助の父、大森留三郎の跡を継いだのは兄の力蔵だ。力蔵には六人の弟子がいて、息子の寅雄（おそらく長男）もそのなかのひとりである［註1］。

一九一二年（大正元年）のある日、日仏両政府のニューカレドニア移民募集のポスターを見て、このどこかわからない国へ行ってみる気になった。なんだか摑みどころのない想像は楽しかったし、「お国のため」とポスターにうたってあればその気になった［註2］。

しかし、鉄之助は出稼ぎに行く前年、兵役検査を受け丙種合格しているので［註3］、移民は兵役逃れだと考えることもできる。

一九一三年二月、鉄之助は長崎港からニューカレドニアに真盛丸で出帆した。日本殖民合資会社を仲介役に、オーフルノー・ド・ヌメア会社と四年契約し、鉱山で坑夫として一日十時間（日の出から日没まで）働くのが条件である。船代はすべて自分持ちだ。船中で、鉄之助は二度医師の診察を受けており、回復に計十五日もかかっている。いずれも医師の診察記録には「麻疹」と記入されている［註4］。

鉄之助が同じ滋賀県出身者と出会ったのは、おそらくこの船上でだろう。それ

表1　滋賀県出身のニューカレドニア契約移民

郡	伊香	浅井	東浅井	神崎	坂田	犬上	愛知	蒲生	高島	計
1910年 琴平丸				2		6		1		9
1913年 真盛丸			5	1	11	6				23
1914年 靖国丸		2			8	4	4		3	21
1914年 彦山丸	1		16		3	6				26
	1	2	21	3	22	22	4	1	3	79

東洋移民合資会社と日本殖民合資会社の移民名簿（外務省外交史料館所蔵）から、津田が作成

以降彼らは県人会を作って互いに助け合っていく。

一ヵ月半を波に揺られ、やがてコネシという港に上陸した。（中略）上陸と同時に木造の小屋が与えられたが、板敷きに毛布一枚で寝る居心地の悪さに期待は裏切られた。（中略）四ヵ月後、鉄之助はコネシから十里程のヤテに移った。（中略）ヤテでは当時としては大掛かりな水力電気の工事が始められ、シナ人、黒人、ジャヴァ人など雑多な人種が集り、日本人も千人を越していた[註5]。

翌一九一四年、二艘の船〔靖国丸と彦山丸〕で滋賀県から四七人がニューカレドニアにやってきた。鉄之助が呼び寄せたわけではないが、彼が故郷へ出した手紙がもとになって渡航の決心をした青年達であった。やがて鉄之助は皆に推されて小ガシラ格になった[註6]。

わずか一年で、鉄之助は鉱山会社の食料品店に勤めるようになり、収入も安定するようになった[註7]。このポストにつけたのは、上役から認められ、フランス語もわかるようになってきた証である。坑夫という肉体労働から解放され、生活はうんと楽になっていたことだろう。

二、第一次世界大戦と外国人義勇兵

一九一四年に第一次世界大戦が勃発する。欧州戦争と呼ばれたこの戦争で、フランスは社会が大きく疲弊し経済的な打撃を受けた。その余波は、遠く離れたフランスの植民地ニューカレドニアにも届き、輸送の手段を失った多くの鉱山が閉山に追い込まれた。そのあおりを受け、出稼ぎにきたばかりの日本人は次々と失業し路頭に迷った。

鉄之助もそういった失業者のひとりで、仕事を求めて首都ヌメアに出ることにした。しばらくヌメア港で荷役の仕事につくが、やがてその仕事もなくなった。いよいよ食べていくことに困ったとき、彼が選んだのはフランスの外国人部隊に入隊し、義勇兵になることだった[註8]。義勇兵になれば、服も食事も寝るところも与えられる。

このときの志願者一一〇名のうち、日本人は一〇一名、鉄之助ら一九一六年に入隊した滋賀出身者は、七名である[註9]。

一同はニューカレドニアで二ヵ月の訓練を受けた後、マルセイユへ向かった。

彼らより先にフランスに入った第一回日本人義勇兵の評判はたいへん悪く、結局フランス軍は彼らを日本に送還した。フランス軍はその教訓から、鉄之助たち第二回義勇兵を戦場に送らず、軍から隔離してブールジュの砲兵工場に送った。その後、鉄之助はサン・ボネというところでアメリカの病院建設の仕事があると聞きつけると、無断でそのままそちらに移り住んでしまった[註10]。

三、パリの料理人

第一次世界大戦が終わった後、〔鉄之助は〕本格的にフランス語を習う気になって、パリに移った。学習院で二〇年間フランス語を教えたというミッシェル・ロボン教授の家の住み込みのコックという職が、彼のパリ生活のふり出しである［註11］。

フランス語が上達すると、今度は日本大使館の仕事でドイツへ派遣された。国際連盟の国籍調査という名目で、鉄之助はそこで事務職についた［註12］。

このあたりから大使館関係者や在留日本人との関わりができてきたのだろう。ドイツからパリに戻った鉄之助は、今度は日本人会に務めた［註13］。

一九二一年、三〇歳のときにマドレーヌというフランス人女性と結婚する。それから間もなく、鉄之助は軍隊脱走の嫌疑で軍事裁判所から呼び出された。ドイツにいたこともマイナスな要因となり、裁判は二年半におよんだ。

「軍服も渡されず、自分の稼いだ賃金で着物も食物も支払う兵隊なんて考えられないじゃありませんか。我が大日本帝国にはそんな珍妙な兵隊はありませんよ、といってやったら裁判長は困った顔をしていました」［註14］

機転を効かした申し立てで、鉄之助は運良く無罪となった。なんでも、かつて長浜市（滋賀県）の弁論大会で一等賞をとったことがあるほど、もともと弁がたつのだった［註15］。

裁判が終わると、フランス料理を学ぶため、鉄之助は日本人会をやめて有名なコルドン・ブルーに二年間通って資格をとった。その資格を利用して、フランス人の邸宅で住み込みコックとして働くようになった。しかし、最初の女主人も、次の女主人も、どちらも大いに問題があり、この仕事を長く続けることはできなかった［註16］。

フランス人の家での住み込みの仕事が続いた後、鉄之助は日本料理屋で働くようになる。

日本料理屋「ときわ」に勤め、この店がつぶれるまで七、八年を過した。「ときわ」時代の鉄之助の思い出には、一九二一年前後の北白川、朝香両宮殿下と、二四年の夏のパリ・オリンピックが一番鮮明に残っている。この二つに通じるものは、彼が骨身惜しまず奉仕した満足感である。パリ・オリンピックでは選手達にリキをつけるために一生懸命に日本食の弁当を作った楽しさだけを覚えている［註17］。

一九三二年「ときわ」がつぶれ、鉄之助は自力で日本料理屋「みやこ」をパリの〝山の手〟十六区のパッシーで始めた。戦前のパリにいた日本人でこの店を知らぬ者はない。パリで一番マシな〝日本料理屋だといわれ、店のほかに大使館の何百人もの仕出しや、戦前の外国で一ばん札ビラを

切った陸海軍武官室の宴会なども多く、大へん繁盛した[註18]。

四、第二次世界大戦下のパリ

一九三九年秋には独仏戦争がはじまり、パリではレジスタンスが激しくなった。日本人の多くがパリを去っていった。戦時中、パリに残っていた日本人は十八名だったといわれる[註19]。

一九四一年に日本軍が真珠湾を攻撃するなか、パリも物騒な様相をおびてくる。

日本の潜水艦がフランスの軍港ブレストにはいるようになったのもこの頃であった。その度に鉄之助は通知を受けて軍港に行き、長い危険な航海を終わった将兵の世話をした[註20]。

パリの一般はひどい食糧不足に悩んでいたが、鉄之助は職業がら楽に闇物資が手にはいった。店は閉めたが、彼は残留日本人の食料かかりとなって買い出しを引受けていた[註21]。

戦争が終わると、また別の問題が出て来た。鉄之助の家は築二〇〇年の古さのため、政府から取り壊し命令が出た。そして政府が用意した十区の場末の小さい住居に妻と移ることになった[註22]。

五、ダゲール通り十一番地

五〇代半ばになった鉄之助は、あいかわらず日本に帰ろうとはしなかった。料理屋を廃業し、今度は額縁屋で勤めるようになる。今までさんざん人の世話をしてきたが、今度は職人として日々額縁に向き合うことを選んだのだ。

もともと木地師の息子であり、仏壇づくりをする職人がいつも周りにいたのだから、額縁の仕事はまさに生来の仕事に戻ってきたということではないか。

鉄之助は角田氏に、「今、額縁に金箔をおくことを勉強しておりますので、それが面白うございましてねえ」と語っている[註23]。

二〇一四年、私は鉄之助の足跡を求めパリに向かった。たいして長くはないダゲール通りは、著名な芸術家も暮らす魅力的な通りである。しかも学生時代にこの近くのギャラリーで見習いをしていた私にとって、ここはなじみ深い下町だった。

なんの準備もしないまま、私はダゲール通りにあるいかにも古そうなT額縁店に飛び込み、「オオモリ」という日本人の額職人の名を聞いたことがないか尋ねてみた。若い店主はとても親切で、目の前で、当時のことを知っているであろう自分の祖母に電話をして私の問いを投げかけてくれた。

すぐに、「ササキという日本人がうちでしばらく働いていて、

その後独立した。たしか彼は交通事故で亡くなった。」という答えが返って来た。「オオモリ」という名前を彼から聞くことはできなかったが、私は、間違いなくこの「ササキ」は鉄之助に近い人物だと確信した。

二〇一六年二月、私は再びパリを訪れた。今度は、友人の協力で、ダゲール十一番地の建物に入ることに成功した。通りに面した扉の内側は、まさに角田氏が書いているとおりの光景だった（写真1）。

この突当たりに近い右側の一軒が今の鉄之助がやとわれている仕事場で、彼は朝八時から夕方六時まで黙々と額縁をけずり続けている。八畳ほどの室には天井から出来上がった額がぶら下がり、仕事台や木材が所狭いまでに置かれて、片隅に小さく坐る鉄之助もゴタゴタと置かれた道具の一つに見える［註24］。

突き当たりのガラス張りの家のインターフォンを鳴らすと、四〇代くらいの男性が出て来て、私達の急な訪問に気持ちよく応えてくれた。室内には、レオナール・フジタがこの場所を描いた絵のコピーが貼ってあった。当然のように、ここが佐々木という日本人の額縁屋だったことを知っていて、レオナール・フジタがよく来ていたことも話してくれた。そしてここで一番古くから暮らしている歴史のM先生（一九四三年生まれ）を紹介してもらった。

あいにく私は帰国しなければならなかったので、友人が代わりに聞き取りをしてくれたところ、M先生は佐々木一家と親しく、鉄之助のことも一九五〇年代に働いていた小柄な日本人として覚えていた。さらに佐々木のひとり娘イザベルが結婚してトゥールーズにいることがわかると、私の友人は早速彼女の連絡先をインターネットで見つけ出した。

私がイザベルにメールを送ると、彼女はすぐに返事をくれた。ちょうど日本に出張するので、日本で会いましょうということになった。偶然にも彼女の滞在先は私の自宅から車で十五分くらいのところだった。

同年三月、私は奈良でイザベルに会った。彼女は鉄之助のことをぼんやりと覚えていた。久しぶりにこんなに父親のことを想い出したこと

写真1　ダゲール11番地、奥が佐々木のアトリエ兼自宅。中央は満開の桜の木。右側にレンガづくりの小屋が大森の作業場だった。（イザベル・ササキ所蔵）

はないと言って、佐々木が経営していた額縁屋のことを話してくれた。佐々木六郎の人生は、鉄之助同様実に興味深いものだった。パリに憧れて集った若い日本人の画家たちを下支えしていたのは、佐々木のような人だったのだと思った。

多少、事実の前後関係が不明な点も残るが、鉄之助の晩年と重なるので、佐々木六郎のことを紹介したい。

佐々木六郎は一九一四年、岩手県生まれ。一九三二年、国の移民政策に賛同し、ひとりでも日本の食いぶちを減らしたいと思い渡仏した。娘のイザベルは、佐々木がフランスである植物学者について園芸を学びたかったと聞いている。その後、画家の下働きなどをするうちに、一転して芸術方面に縁ができていったのだろう。

イザベルによると、佐々木が額縁屋を始めるきっかけになったのは、彼が自分で彫った鯉のレリーフのある額を妻に贈ったところ、妻がそのできの良さに驚き、これを商売にできないかと提案したことが発端らしい。

一九四〇年春、ナチス・ドイツの侵攻が近づくと、佐々木はトラック三台分に積み込んだ松方コレクションの絵画四〇〇点を、パリ郊外に運んで保管する役目を担った［註25］。

一九四二年、佐々木はパリ十六区に小さな額縁屋を開いた。やがてモンパルナスから近いダゲール通り十一番地に本格的な額縁店を開いた［註26］。

同年の日本人会の名簿に載る佐々木と鉄之助の住所はいずれも十六区だ［註27］。ふたりが親しくなるのは自然なことだったろう。コックの仕事をやめた鉄之助に、佐々木が自分の店で働かないかと声をかけたのかもしれない。

それから佐々木は十四区に引っ越し、ダゲール十一番地の奥のガラス張りの家が空くと、それをアトリエ兼自宅として確保、さらに小さな中庭に建つ小屋のNo.2とNo.4を作業場にするため借用した。

角田氏が訪ねた鉄之助の仕事場は、このNo.2の小屋で、その前のスペースには佐々木が植えた桜の木があった（今は切られている）。

ダゲール十一番地には、小さな貸部屋がたくさんあって、いろんな国から来た若い芸術家が集まっていたそうだ。イザベルは、肩寄せ合って暮らす、デンマーク、ロシア、日本、スペイン、アイルランドなどから来た異邦人たちとの日々を懐かしそうに語った。コスモポリタンな芸術の町パリの縮図のようなところだったのだろう。

週末になると、佐々木はきまってパリ郊外の田舎にある別荘に家族と出かけた。写真が好きで、いつもイザベルの写真を撮っていたそうだ。

一九六八年三月、単身別荘に向かった佐々木は交通事故で帰らぬ人となる。父の葬儀に大勢の人が集まったことにイザベルはとても驚き、多くの画家達に額を作ってきた父を誇りに思っ

た。

佐々木の死後、しばらくは妻のシモーヌが額縁屋を続けたが、やがてそれも難しくなった。シモーヌは二〇〇二年に亡くなった。彼女が遺したアドレス帳には鉄之助の名前もあり、角田氏が出会ったときに鉄之助が暮らしていた十区の住所が記入されていた［註28］。

六、郷里への帰還

私は、鉄之助の終焉の地を探していた。つまり彼の墓を探していたのだ。そして、二〇一五年十月、醒ケ井の上丹生を初めて訪れた。このとき、村の墓地で見つけた大森家の墓は、鉄之助の兄嫁りよが昭和四〇年（一九六五）七月に建てたもので、墓には夫婦の名前の他に鉄之助の名前が刻まれていた。結局彼はここに帰ってきたのだろうか。

上丹生には鉄之助の兄、力蔵の家が残っていたが、あいにく誰も住んではいなかった。村では力蔵のことはわかっても、その弟である鉄之助のことを覚えている人には出会えなかった。

ところが、知人の紹介で聞き取りをしたSさんから、力蔵の息子にはフランスに行って帰ってきた人がいたということを教えてもらうことができた。すでに故人となったその人は、血縁でいえば鉄之助の甥にあたる。

隣人たちは何故フランスなのか疑問に思っていたようだが、叔父である鉄之助がいたのだから突飛な話ではない。しかし、その渡航理由が何かを学ぶためだったのか、あるいは鉄之助に会いに行ったのかはまったくわからない［註29］。

この甥は、一九四〇年頃フランスから戻ってから結婚し、しばらく仏壇以外の木製の工芸品を開発しようとしていたようだが、残念なことに早逝した。

鉄之助はフランス人女性と結婚していた。だから、私は当然彼の墓はフランスにあるだろうと思っていたので、醒ケ井の墓石に大森鉄之助の名前が刻印されていたのを見ても、それは単に「名前」を彫ってあるだけだと考えていた。

ところが、イザベルから、自分の父と母はそれぞれの郷里に埋葬されることを望んだと聞いたときに、もしかすると鉄之助もそうだったのかもしれないと思うようになった。確証はないが、長い放浪の末、鉄之助は兄夫婦とともに郷里に眠っている、今はそんなふうに感じるのである。そう考えると、私は、晩年の鉄之助は額縁をつくりながら、結局一度も帰ることのなかった滋賀の郷里、上丹生に想いを馳せていたにちがいない、そんなふうに想像してしまうのだ。

註

［註1］彦根仏壇史編纂委員会編『淡海の手仕事 彦根仏壇』1996 彦根仏壇事業協同組合 130頁（以下『淡海の手仕事』）

［註2］角田房子「たんぽぽ鉄之助」『文藝春秋』一九六一年七月号（以下角田）320頁

［註3］角田320頁

［註4］『日本殖民合資会社認可報告雑件』第一巻 外務省外交史料館所

［註5］角田320—321頁

［註6］角田322頁

［註7］角田322頁

［註8］角田322頁

［註9］Philippe Palombo La présence japonaise en Nouvelle-Calédonie (1890-1960) 2000 ANRTの別冊にある外国人義勇兵の記録簿をまとめた表（Palombo作成）から算出した。

［註10］角田322—324頁

［註11］角田325頁

［註12］角田325頁

［註13］角田325頁

［註14］角田327頁

［註15］角田326—327頁

［註16］角田328—329頁

［註17］角田329頁

［註18］角田330頁

［註19］Marchesseau氏

［註20］角田330頁

［註21］角田330頁

［註22］角田331頁

［註23］角田332頁

［註24］角田331—332頁

［註25］尾崎特派員「滞仏三三年の日本人」『読売新聞（ヨミダス歴史館）』一九六六年二月二四日（以下、『読売新聞』）読売新聞ではパリ郊外とあるが、イザベルはコレクションをノルマンディーの農家に隠したと叔父から聞いている。松方コレクションは、ナチスからは守ることができたものの、敗戦国の資産として戦後フランスが接収した。一九五一年サンフランシスコ講和会議のときに、吉田茂首相が仏外務大臣と交渉し、美術館の建設を条件に一部が返還された。

［註26］『読売新聞』

［註27］9 rue Alfred Bruneau（十六区）

［註28］12 écluse saint Martin Cité Jacob（十区）

［註29］『淡海の手仕事』128頁には、一九二六年にパリで開催された万国美術工芸博覧会に、上丹生の森光太郎の木彫工芸品が入選したとあるので、筆者は力蔵の息子の渡仏がそれに何らかの関係があって渡仏した可能性もあると考える。

参考文献

・彦根仏壇史編纂委員会編『淡海の手仕事 彦根仏壇』１９９６ 彦根仏壇事業協同組合
・角田房子「たんぽぽ鉄之助」『文藝春秋』一九六一年七月号
・津田睦美、研究ノート「第一次世界大戦における仏領ニューカレドニアの日本人義勇兵」『文化誌 近江学』第6号』二〇一四年
・尾崎特派員「滞仏三三年の日本人」『読売新聞（ヨミダス歴史館）』一九六六年二月二四日
・Philippe Palombo La présence japonaise en Nouvelle-Calédonie (1890-1960) 2000 ANRT

調査協力

・Vincent Romagny
・Isabelle Sasaki
・在フランス日本人会

「魚治　鮒寿し」を描く

西久松　吉雄

「魚治　鮒寿し」を描く

西久松　吉雄

Name :
NISHIHISAMATSU　Yoshio

Title :
Painting “Uoji Funazushi”

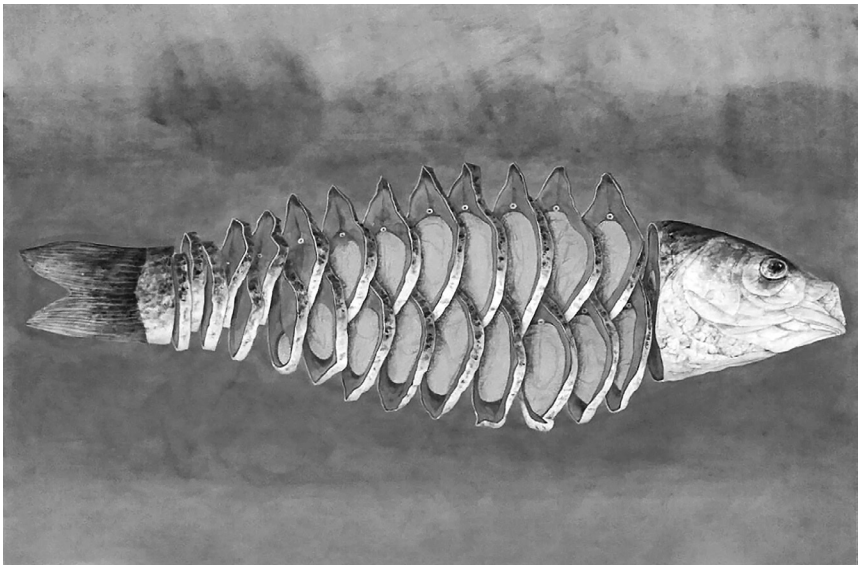
Summary :
The shape of the funazushi made in the Okubiwako area by the seventh generation master Uoji brings to mind Uichi Takahashi’s work “Sakezu.” The process of painting funazushi provides a window onto the richness of nature and daily life in the Omi area.

鮒寿しを描くきっかけは、成安造形大学附属近江学研究所の公開講座二〇一六の近江のかたちを明日につなぐシリーズの中で、平成二八年六月第一回連続講座「鮒寿しとその環境が教えてくれること」と題して、左嵜祐氏に講師をお願いしてからであった。

左嵜氏は、江戸時代の天明四年（一七八四）創業の老舗鮒寿し店「魚治」七代目治右衛門を襲名して一子相伝の鮒寿しの伝統を継承、奥琵琶湖海津の料亭「湖里庵」にて鮒寿し懐石を提供されている。小雪が舞う日、狐狸庵先生で有名な遠藤周作氏が「湖里庵」と名付けた掛け軸のある間で鮒寿し懐石をいただいた。日が沈みかけた窓辺からは、初冬の湖北の山並みと琵琶湖岸近くに鴨とユリカモメがゆらゆらと水辺に浮かび、澄み切った空気の中で聞こえるのはさざ波の音のみであった。

「鮒寿しを描くこと」は、鮒寿しを知ることから始まる。伝わってきた歴史、それを育んできた自然環境、人の生活から生まれ育ってきたことなどを知ることは、描く対象をより深く理解しながら対象に迫ることである。

麹（こうじ）カビなどから食品発酵の作用を用いて日本酒、味噌、食酢、漬物、醤油、焼酎、泡盛などの発酵食品が作られる。鮒寿しは、



「魚治　鮒寿し」30号P　純金泥・岩絵具　石州楮紙

乳酸菌を用いて自然発酵されたものである。仕込み蔵に棲み着いて発酵する蔵持ちの菌を大切に育てて守る。乳酸菌という微生物が鮒寿しを作っている、発酵のお手伝いと段取りをしているに過ぎなく「守り（もり）をする」と言われる。

海津の地は、琵琶湖の水と川や山の水に恵まれた地であり、琵琶湖で育ったニゴロブナを海津の水と若狭の塩で漬け込む。そしてニゴロブナとともに漬け込む米は、百瀬川と知内川によってできた扇状地で育まれた米を使用する。また海津の厳しい気候が味を深めるという。

琵琶湖にはギンブナ、ゲンゴロウブナなどが生息している。そして琵琶湖固有種のニゴロブナは体長二〇～二四センチ、体重二〇〇～五〇〇グラムで発酵食品鮒寿しの原料として卵を抱いたメスが使用される。オスも旨味が多く刺身や煮付けとして使われる。

四〇年ほど前に琵琶湖はよく魚釣りに通った場所である。ボテジャコの名前で知られているタナゴの中では大きなカネヒラという魚を、バケツいっぱい釣れる入れ食い状態であった記憶が今でも残っている。家に持ち帰るとボテジャコを醤油と砂糖と味醂で佃煮にして暖かいご飯と共に食べた。そのような記憶といままで鮒寿しを食べる機会があまりなく関心がなかったが、この公開講座を拝聴するうちに琵琶湖の地形と恵まれた自然環境から生まれた鮒寿しと、江戸から明治に移る時代の絵画変革期に生きた高橋由一の「鮭図」が重なってきた。

高橋由一の「鮭図」との出会いは、高校生の頃に日本美術史の教科書に掲載されていたことが最初であった。その後、昭和四九年（一九七四）発行の至文堂「近代の美術　高橋由一　青木茂編」を購入して以来、この「鮭図」が脳裏から離れなかった。そして平成二四年（二〇一二）九月京都国立近代美術館で「近代洋画の開拓者　高橋由一」展が開催され三点の「鮭」が展示されていて、再び出会いの感動が歓喜された。

「鮭」油彩・紙　明治十年頃（一八七七）高橋由一四九歳頃の作　一三四・四六×四六・五センチ　重要文化財　東京芸術大学所蔵

「鮭」油彩・麻布　明治十一年（一八七八）一二七・五×三六・五センチ　山形美術博物館寄託

「鮭図」油彩、板　明治十二年～十三年頃（一八七九～八〇）一二七・五×三六・五センチ　笠間日動美術館

吊り下げられた塩鮭は重量感と存在感があり、その対象に迫る存在感に圧倒された。

一八七二年「花魁図（おいらんず）」、一八七六～一八七七年「豆腐」、一八七七年「なまり」の写実的に描いたものがあり、「鮭」「鮭図」へとつながっている。一八八四年には、「川鱒（かわます）図」も同じように荒縄に吊るした鱒を描いたものがある。他に、伝高橋由一「鮭」作品もあり、由一の門人やその周辺でよく鮭が描かれていたらしい。

魚治の鮒寿しは、切り身の並べ方を魚の形状に沿って置かれている。その点にも鮭図とイメージが重なり、メスのニゴロブナの卵の美しさや形状を墨と日本画材の岩絵具で石州楮紙に描き、余白の空間に思いを込めた。画面全体に純金泥を施し宋画を意識しながら、奥琵琶湖で感じた気候や風土を盛り込めればと念じながら筆を置いた。

参考文献

・「近代の美術　高橋由一　青木茂編」至文堂　一九七四年
・「近代洋画の開拓者　高橋由一」展　図録　京都国立近代美術館　二〇一二年

執筆者一覧（掲載順）

吉村　俊昭　成安造形大学教授　附属近江学研究所研究員

石川　　亮　成安造形大学助教　附属近江学研究所研究員

加藤　賢治　成安造形大学准教授　附属近江学研究所副所長・研究員

津田　睦美　成安造形大学教授　附属近江学研究所研究員

西久松吉雄　成安造形大学教授　附属近江学研究所所長

※掲載は、近江学研究、学内研究員（五十音順）の順。

編集後記

今冬は度重なる大雪に見舞われ、大学が立地する湖西でもひと駅北上するごとに雪深く変わっていく景色に、南北に細長い滋賀県の風土の多様さが実感されました。

本紀要では本学研究員から５編の論考が寄せられました。吉村研究員による近江の絵馬の現況調査は、４年間で県内全域を網羅した大まかな調査を終え、本号が第３回の報告です。石川研究員は、美術家の視点・表現との相関の中で位置づけられた近江の水についてシリーズで語っています。加藤研究員は、旧志賀町の樹下神社の五箇祭にかかわる寄人衆という独特な祭礼組織について、および、祭礼に関わる旧住民と新住民の関わりという２つの観点での報告です。津田研究員は、滋賀から移民としてニューカレドニアへ、そしてパリへと渡ったひとりの日本人の生涯をたどっています。西久松所長は、近江の郷土料理である鮒寿しを描くことを通して、琵琶湖の自然環境や近江の風土・伝統に思いを馳せています。

人、もの、こと（出来事）のつながりによって浮かび上がる物語をとらえ、この先の未来につながるような研究を今後も積み重ねてまいります。よろしくお願いいたします。

編集担当　永江　弘之（附属近江学研究所研究員）

成安造形大学附属近江学研究所紀要　第６号

発行日　平成29年３月24日

発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学　附属近江学研究所
〒520-0248　滋賀県大津市仰木の里東４-３-１
電話　077-574-2118

発行者　西久松吉雄

編　集　成安造形大学附属近江学研究所

印刷所　宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937

【　　】

成安造形大学

JOURNAL OF OMI MULTICULTURAL INSTITUTE
OF SEIAN UNIVERSITY OF ART AND DESIGN
NO.6